

俳句雑誌

令和八年一月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十九巻第一号

水 明

2026 1月号



新年明けまして

おめでとうございます

本年もよろしく

お願いいたします

令和八年新春

主宰

山本鬼之介

創刊百周年に向けて

いよいよその一歩を

踏み出す年です

さあ皆さん元気に

まいりましょう

今月の巻頭句

季音雪

張衣のあざやかなるや秋天下

森川義子

季音月

秋惜しむ空よ草木よ水音よ

梅澤佐江

季音花

割烹着の似合ふ妻ゐて菊臈

石田慶子

水明集

次郎吉を困らすほどの良夜かな

反町 修

山紫集

磯桶も野積みになされて秋の潮

原田秀子

水 明

令和 8 年
1 月 号

新年のご挨拶

今月の巻頭句

霞む湖（作品）

庭の四季（近詠）

望郷（近詠）

百尺竿頭 〓主宰作品の鑑賞

ゆずり葉 〓季音月評

季音「雪」（同人作品）

季音「月」（同人作品）

季音「花」（同人作品）

現代俳句鑑賞

『水明誌』を繙く

水 明 集

反町 修
霜多光代 倉田星歩
ほか

作品鑑賞

山本鬼之介

山本鬼之介

永野史代

茂木和子

五明 昇

檜鼻ことは

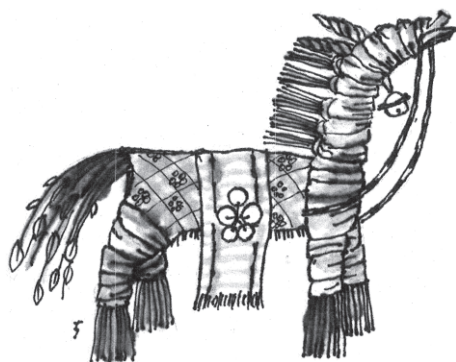
森川義子 森本早苗
山中みどり ほか

梅澤佐江 丸山マズミ
大場順子 ほか

石田慶子 渋谷さいち
染谷風子 ほか

網野月を

田中木江



水 琴 窟 (水明集十一月号鑑賞)

池 田 雅 夫

46

山 紫 集

48

俳 誌 望 見

梅 澤 輝 翠

54

句 集 喝 采

菅 原 卓 郎

55

運 営 組 織

56

行 事 予 定

58

例 会 ・ 句 会 案 内

59

例 会 報 ・ 各 地 句 会 報

62

新 春 俳 句 大 会

70

指 導 者 お よ び 幹 事 の 会

71

水 明 忌 の お 知 ら せ

72

令 和 八 年 新 珠 賞 作 品 募 集

72

水 明 の 記 事 他 誌 よ り 転 載

74

水 明 発 展 基 金 御 礼

76

後 記

題 字 … 長 谷 川 かな 女 表 紙 … 内 田 恵 子 カ ッ ト … 福 田 千 春

霞む湖

山本鬼之介

進むべきその路我に初明り

躍動感漲る吉書大社

明眸の見据うる的や弓始

水神の眠る湖底ぞ初霞

年男を歌留多で負かす年女

新聞を広げ「ふむふむ」お元日

賀状に猫の名前も記され紛らはし

謹厳な隣家の主人四方拝

庭の四季

永野史代

冬 浅し 白 花 黄 花 多 き 庭
皇 帝 ダ リ ア 己 が 心 を 見 透 か さ れ
秋 明 菊 の や さ し き 白 を 愛 で て を り
白 小 菊 故 郷 よ り 持 ち 来 い ま 盛
つ は ぶ き は 夫 研 究 の 花 よ く 咲 け り
冬 蝶 の 狭 庭 を ま は り つ つ 消 ゆ る
枯 れ 一 面 わ が 生 涯 も 枯 れ 半 ば

佇みて
今年も残り一ヶ月となった。一年の経つ速さを感じるこの頃である。かな女賞を頂き、忙しい最中に義弟が亡くなり、個人の体調も色々、病院通いの多い正に何でもありの一年であった。それでも又来年は良い年でありますようにと祈らずにはいられない。庭の草花にも春夏秋冬があるように、人の一生もそうなのだ。晩秋から初冬の頃が一番美しい季節、と故福岡穂郎師が言われた事を思い出した。「山鳩の胸離れては黄葉降るなり」穂郎師作。
さあ、又来年に向かい明るく生きて行こう！庭に佇みながらそんなことを思っている。

望郷

茂木和子

木	木	枯	か	リ	木
酩	酩	蠟	ま	ユ	酩
の	の	螂	き	ツ	の
頃	頃	屋	り	ク	合
合	合	敷	の	よ	ひ
ひ	ひ	稻	未	り	狙
狙	狙	荷	だ	取	ふ
ふ	ふ	の	枯	り	鳥
鳥	鳥	裏	れ	出	獣
獣	獣	扉	切	す	
			れ	土	
			ぬ	産	
			草	枝	
			の	葉	
			色	柿	

荒	残	残	残
草	菊	菊	菊
に	に	に	に
眼	日	日	日
鋭	の	の	の
き	当	当	当
枯	り	り	り
蠟	た	た	た
螂	る	る	る
	微	微	微
	香	香	香
	か	か	か
	な	な	な
	志	志	志

童謡「故郷」の歌の詞ではありませんが、私達の小さい頃は朝から夕方まで遊びに夢中でした。その頃の純粋な気持が、少しずつ失われ乍ら大人になりました。今その頃の自分をなつかしく思い出しています。現在生活している周りには新築マンションやお洒落な戸建てが多い中、昔の自然を残し生活をしている屋敷があります。立派な長屋門、白壁の土蔵、屋敷神の祠もあります。屋敷内には樗や棕の大木、四季折々の花々又果実、それを狙って来る虫や鳥、時には白鼻心までとか。ある時空師が作業をしているのを見つけた事もあります。屋敷守の行き届いた手入れに頭が下がります。今日も鈴成りの柿や皇帝タリアを見上げ乍ら、いい俳句を作りたいなあと思っている昨今です。いい俳句とは……。

百尺竿頭

● 主宰作品の鑑賞

五 明 昇

九・十月合併号

少年の日の「二十面相」 夏館

怪人二十面相は、江戸川乱歩の少年向け作品「少年探偵団シリーズ」ほぼ全巻に登場する怪盗。名探偵明智小五郎及び小林少年率いる少年探偵団の宿敵として描かれ、戦前から戦後に到るまで、日本国中を騒がせたダークヒーローであった。この時代に少年期を過ごした世代には、古びた夏館は今でも二十面相のアジトを彷彿とさせ緊張感が漂う。

虫干や序列 確たる五つ紋

「五つ紋」とは着物の最も格式が高い第一礼装に用いられる、背中、両袖、両胸の五カ所に入れる家紋のこと。礼儀を尊び、血筋を後世に受け継いでゆくものとして、フォーマルな場にふさわしい装いとされている。着物や書籍などの貴重な家財に蠹や虫がつくのを防ぐための「虫干」の際も最も大切に扱われ、静かに登場の機会を待つことになる。

蚊柱へジャンヌダルクのごとく行く

「蚊柱が立つ」とは、ユスリカなどの羽虫の群れが柱のように見える現象で、雄が雌を呼び寄せるための繁殖行動であ

る。繁殖期になると雌はたった一匹で蚊柱の中に飛び込み、相手を見つけて交尾し産卵する。この勇敢な行動を、百年戦争中のフランスを救った国民的ヒーローである聖人ジャンヌ・ダルクに重ねた斬新な一句だ。

雲海へ下りてワルツを踊りたし

雲海とは山頂など高度の高い位置から見下ろした時、雲に譬える気象景観である。各地で山麓と展望台をロープウェイやリフトで結んだ雲海観光が人気だが、「雲海テラス」や「展望テラス」に立てば雲海に手が届きそう。気流に乗って自在に動く雲の動きは、大勢の男女が手を取り合って踊るワルツのようで、思わず引き込まれそうになる。

前進の果ては 驀進雲の峰

山本主宰は、昨年一月号で「水明創刊九十五周年の慶事を発条に、待望の創刊百周年へ驀進していく」と高らかに宣言。九十五周年の記念号では九十周年からの五年間を「ホップ」、これからの五年間を「ステップ」と位置づけ、百周年のバーを見事な「ジャンプ」で乗り越えたいと決意を披歴した。洋上の峰雲には大いなる「百」の文字が見え隠れしている。

十一月号

秋の灯や絵蠟燭にも秋の灯を

絵ろうそくは、漆の実から精製された和ろうそくに花などの絵をあしらったもので、越後長岡や会津、庄内地方などの工芸品。雪国で冬の間花が咲かない時期に、仏様にお供える花の代わりとしてろうそくに花の絵を描いたことが起源とされている。静かでなつかしく、物思いに誘われるような秋の夜。お供え花の代わりに仏壇の絵ろうそくに秋の灯を点し、大切な人と語らうしみじみとした一句だ。

薯蕷汁わが家系図に謎の人

薯蕷（とろろ）汁とは、山芋や長芋をすりおろし、だし汁と味噌などで割ったものだが、自然薯、長芋、やまと芋などでそれぞれ粘りや味わいが異なる。出汁にも鰹だし、鯖だし、昆布だし、椎茸だし、鶏だしなどがあり、味噌仕立てや醤油仕立てなど多様な味付けが存在する。地域によって様々に異なるところの汁の系統と、山本家の家系図の取り合わせが絶妙な雰囲気醸し出している。

その奥にかな女居さうな秋簾

夏の強い日差しを除けるために用いた簾が、秋になっても外されないまま残っている。少し傷んでいたり、巻き上げら

れていた、哀愁を感じる景だが、掲句はその簾の奥にかな女がひっそりと佇んでいるようだと言う。かな女が四十年余りを住み暮らした浦和市岸町界隈にはいかにもありそうな情景。昨秋、水明創刊九十五周年を機に『長谷川かな女の百句』を上梓された主宰のかな女への深い憧憬に感動する。

頬杖の視線を止むる蜂屋柿

蜂屋柿とは、岐阜県美濃加茂市が発祥とされる大玉の渋柿「蜂屋柿」と、それを原料とした干し柿「堂上蜂屋柿」を指す。堂上蜂屋柿は「堂上」の名が示す通り、平安時代から朝廷や将軍に献上されてきた歴史を持ち、織田信長や徳川家康も好んで食べたとされる。頬杖の御仁が蜂屋柿を目にしたのは最高の眼福。柿は収穫後四十日ほど寒風と天日にさらされ、糖度六十度の「干し柿の王様」に出世する。

修学院離宮のもみぢ苔に和し

修学院離宮は、京都市左京区修学院の比叡山麓に、後水尾天皇によって造営された山荘である。総面積五四万㎡の広大な離宮にはカエデなどが分布し、京都を代表する紅葉の名所とされる。ことに巨大な人工池・浴龍池や隣雲亭がある上御茶屋などの光景や、急な斜面を散策しながらの紅葉狩りは圧巻。中でも緑の苔に舞い散る紅葉は、王朝文化の美意識の到達点とされる離宮にあって、心に染りたい一景だ。

ゆずり葉

◆季音十一月

檜 鼻 ことは

手捻りの鉢のいびつや今朝の秋

境 延昭

もう二十年も前のこと。備前を旅した時に、陶芸教室を訪れたことがあります。ろくろを使わずに手で形を作り上げていく「手捻り」の技法で猪口をひとつ。登り窯で焼かれた自作の猪口が送られてきたのはそれから二か月ほどしてからのことでした。焼き物の愉しみは、「観賞する」「使う」「作る」と多岐にわたりますが、詠者が手にしている手捻りは、きつと氣に入りの鉢なのでしょう。「いびつ」という言葉が、鉢の味わいを表す語として使われているのがこの句の妙のように思えます。作者が愛着をもつてこの鉢に目を留めていることが伝わってきます。そして下五の「今朝の秋」。手捻りの鉢への視線を通して季節を語る。韻文に相応しい繊細さが際立つ一句です。

夏草や嘗てこの地に大本営

日高道を

「大本営」、戦争の歴史の重さを一気に呼び起こす言葉です。作者は、「嘗てこの地に」とだけ述べ、嘗て戦争があったという事実を鮮烈に語ります。夏草は、歴史の大事件でさえ時間とともに風化していくことの象徴のよう。揚句は戦争を直接的に語らず、感傷を煽ることもしていません。それゆえに、読む側の胸にさまざまな感情の余白を生み、読者それぞれの記憶や知識を重ねることで、多層的な読みができる一句になっています。

大本営の本部建物は、現在の防衛省市ヶ谷地区の庁舎A棟と同じ場所にありましたが、現在は同じ防衛省の敷地内に市ヶ谷記念館として移設されています。

夾竹桃街路樹となり海に添ふ

松山清子

葉が竹に花が桃に似ていることが花の名の由来と伺いました。見た目はとても爽やかな姿なのですが、花や茎だけでなく葉や根も強い毒を含む植物なので、取扱には注意を要しま

す。しかしながら、道路や公園などで見かけるその凛とした姿は、辺りの景色をいつそう鮮やかにします。余談ながら、原子爆弾により焦土と化した広島市。被爆後いち早く咲いた花がこの夾竹桃であったことから、広島市の市の花になっています。

夾竹桃は強い日差しと真つ青の空に映える花。揚句の「街路樹となり海に添ふ」という措辞から、海辺のまぶしい光と相まって、南国的、あるいは旅情を帯びた風景が伝わってきます。海岸沿いの道路、潮風の匂い、白い光、そして夾竹桃の花の色。視覚・嗅覚・空気が匂の中に重ねられ、まるでその道を散歩しているような開放感に浸ることができました。

跳ねたれば街も跳ねたる倭武多の夜

渋谷きいち

躍動感あふれる一句。夏の青森へ行かれたのでしょうか。羨ましい限りです。

観光案内を見れば、「倭武多は、主に青森県五所川原市で行われる五所川原立倭武多を指し、高さ二十メートルを超える巨大な山車が特徴で、毎年八月四日から八日に開催されます。運行時には太鼓や笛、鉦などの囃子に合わせて、ヤツマレという掛け声が響き渡ります。」との説明。

これは是非映像で見てみたいと、配信されている動画を拝見しましたが、「ヤツマレ! ヤツマレ!」の掛け声勇ましく、喧嘩ねぶたの真骨頂。一方、青森ねぶた祭は、色鮮や

かな衣装を身につけた跳人が、「ラッセイラッセイラッセイラ」という掛け声をかけながら跳ねるように踊りまわります。揚句は、音韻的にもテンポがよく、「跳ね」が繰り返されることで、跳躍の様子が伝わってきます。視覚・聴覚・身体感覚が一体となり、祭りのクライマックスを体感することができました。跳人の跳躍は街全体の躍動へつながり、祭の熱気が空間そのものを震わせる瞬間を見事に表現しています。

サングラスかけたら無敵おませな子

越田 栄子

男の子女の子に限らずサングラスに憧れる時期というものがあるのかもしれないと随分昔のことを思い出しました。

サングラスをかけるだけで、なんだか違った自分になったような、映画やドラマに出て来るヒーローになったような、大人になったような、そんな子ども特有の想像力と高揚感のある気持ちで、「かけたら無敵」という簡潔な措辞で、端的に描いています。続いて下五の「おませな子」の言葉が、ただ格好をつけているだけではなく、背伸びをして大人のまねをしている可愛らしさを伝え、とても魅力的な句に仕上がっています。サングラスをずらしてみたり、ポーズを取ってみたり、鏡を見ながら「どう? カッコいい?」と内心わくわくしている姿。その微笑ましい一瞬が生き生きと描かれています。

季音雪

新松子 森川義子

句碑囲む石に貌あり新松子
お茶室に入る朱の帯萩の花
薄れゆく富士の茜や秋の声
長月や埠頭に戻る練習船
張衣のあざやかなるや秋天下

時雨 森本早苗

時雨るるや園児の列のぐちやぐちやに
飛火野にホルンの響く夕時雨
胃袋の検査難なし新走り
立冬を待てず一号吹き荒るる
縁を切る話調ふ神の留守

山粧ふ 山中みどり

粧る山俯瞰してロープウェイ
山粧ふ熊除け鈴を後先に
終焉に向かふ華やぎ山粧ふ
炊き立ての栗飯を盛る曲げ輪つば
ふり入れし酒ほの香る栗の飯

なりぬ 網野月を

冬 構 井上燈女

吹きてこそ風とはなりぬ後の月
降りてこそ雨とはなりぬ今朝の冬
満ち欠けて月とはなりぬ冬の鹿
朝迎へ夕べとなりぬ忘咲
老いてこそ人ではありぬ神還

冬仕度仕分け幾度繰り返す
小暗さも安らぎの内冬構
切絵図の百羽眼に入る都鳥
殿様も姫も訛りし村芝居
地芝居や殺され役が幕引きに

秋の暮 石井喜恵

清 秋 石山かつ子

秋しぐれ古刹に闇の深まりぬ
観劇の昂ぶり未だ秋時雨
暮の秋千体まつる地藏堂
夕日燃ゆ軒に色付く柿簾
走り書き出掛けのメモに柿一つ

威風堂堂唐松林秋澄みぬ
清秋や山縫ふやうに郵便車
湖の底まで透けて秋惜しむ
天守まで急階段や秋惜しむ
鷹狩行列高張提灯先立てて

照葉 大橋 廸代

道程 五明 昇

から堀にひびく鶏鳴照紅葉
甚五郎の鯉がはねたり照紅葉
照葉して鎧に試射の痕あまた
一瞬や蛇わしづかむ青鷹
木枯一号かもめと鳶をひるがへす

宵闇や駄に始まる在所の灯
偕老の息びつたりと吊し柿
秋霖や里宮に点く昼の燭
一病を息災として温め酒
晩節の長き道のり桐一葉

秋惜しむ 菊池 ひろこ

鎮守の祝詞 境 延昭

秋惜しむ修正液の白さかな
復元の古都で酒買ひ秋惜しむ
奈良白露復元の楼ひとつ増ゆ
落花生鞘の網目も陽も白し
霧の街葉脈さぐるごと往けり

「申す」でをはる鎮守の祝詞秋の声
読み止しの本のあれこれ秋惜しむ
秋時雨冠木門ある閑所跡
氷川の杜重陽すぎて菊花展
木の葉雨チャペルの鐘が鳴つてゐる

秋 思 島津初花

父や母稲を背負うて一世代
炒り鍋に爆ぜし椎の実子沢山
そぞろ寒便利グッズに惹かれたり
人形の髪の纏れや夜の長し
四文字の暗証番号冬初め

秋 の 雨 鈴木康世

秋の雨灯して暗き巫女だまり
曲り屋に馬具の匂ひや秋の雨
秋雨や陰影見せし鬼瓦
寺廂暫し借りたる秋驟雨
老犬のとがりし背骨秋霰雨

紅 葉 十倉和子

屋台蔵凜と白壁照紅葉
絡繰^か人形^くの所作みやびなり秋祭
摺り足で進む吊橋紅葉晴
早瀬越え紅葉筏となりゆけり
かりがねや目鼻うすれし磨崖仏

鯖 街 道 鳥羽和風

鯖街道走る時雨の十八里
茶の花やこぼれて淋し椀の飯
婆ちやんのめつちやおいしい煮大根
新札が財布に馴れてクリスマス
索莫と戦下の子等よ蓮枯るる

良きをとこ

永野史代

干柿を干してやさしき軒のあり
女面の口元ゆるぶ浅き冬
秋果供へて兄に告げたきことありぬ
良夜かな勝手口より水の音
良夜かな網野月をは良きをとこ

置いてきぼり

星野和葉

願ひ事置いてきぼりに星流る
しんがりに己を重ね運動会
商品に鍋釜並ぶ運動会
秋懷や棚の奥より古日記
手鏡に写らぬものや秋わびし

恐竜博物館

町野広子

栗茹でて強気に生きる一人親
柿干して厨で母が咳払い
柿を干す廂の長き父の里
柿一つ供へられたる辻地藏
恐竜博物館出でて現世の秋の空

温め酒

松井由紀子

どの路地もくまなく濡らし秋時雨
秋深し御物の笛の音やいかに
木枯や「魔王」のピアノひた走り
冬はじめ眼医者に診せるあかんべい
褒め上手のきみと飲みたし温め酒

青　　空　　茂木和子

庭石に光る湿りや空澄みぬ
秋澄むや筑波山麓一望す
甘くなれ甘くなあれと柿を干す
吊し柿くぐりて届く回覧板
軒吊りの干柿ねらふ鳥獣

人　　の　　影　　大村節代

善人の顔して黙秘秋深し
熊出現姥捨山に人の影
なかなか冬眠しない熊二頭
丹頂来背伸びしてゐる親子連れ
冬日和五百羅漢は密談中



季音月

冬日和 梅澤佐江

敗荷の池より暮るる古利かな
秋声や風色寂ぶる天主台
秋惜しむ空よ草木よ水音よ
日捲りのつくづく薄し秋惜しむ
張板に母の面影冬日和

秋澄む 丸山マシミ

空に木に草に声あり秋澄めり
無花果や手織の機の軽き音
分去れの馬頭観音と秋惜しむ
初霜に轍残して始発バス
蓑虫も雅びを知るやねねの道

神楽坂 大場順子

蕭蕭たる松風透かし秋簾
秋霖の昼を灯して神楽坂
枯山水の石の声きく暮の秋
秋惜しむまなざし深き伎芸天
湘南の海に小春の真帆片帆

移ろひ 青木鶴城

冬めくやかさかさかと肌の擦れ
隊列の靴音のごと朴落葉
口先のもろき和平や神迎
冬の湖深淵に時沈みゆく
陽の色に時の移ろひ山眠る

佳き人生 正木萬蝶

佳く生きて今日の夕餉の菊膾
香箱を閉ぢしもほのか秋惜しむ
冬日向子規の横顔まねてみる
神の旅やどにあぶれし神のゐて
朗月や旅のしまひの紅葉川

鼓膜に届く秋

日高道を

幫間の居住まひ正す白露かな
裏張りの春画蠢く古襖
ヴィオロンの音色は秋の野に似合ふ
檄の飛ぶ釣瓶落しの野球場
稽田のひつじ一匹歩み出す

武蔵野

近藤徹平

土均しを洗ひ武蔵野秋収め
村芝居白浪きどる爺五人
稽田や轍のしるき散居村
鼻の差の写真判定天高し
夕陽追ふトロツコ列車秋惜しむ

初冬

檜鼻ことは

このごろは案山子へ会釈して散歩
稲架かけて暫し安堵の村暮らし
栗拾ふ昭和の歌謡歌ひつつ
律の風^{ひだり}左京への道しるべ
初冬や墨のかをりのする仏間

ふるさと

荒井俱子

疎開せし此処がふるさと草紅葉
柚人は平家の謂れにぎり酒
姫と侍女同じ面立ち菊人形
へその緒もミイラのひとつ鵲の贅
鵲の空秩父連山よく見ゆる

流れ星

松宮保人

一湾へ傾る棚田の稲を刈る
そぞろ寒三角巾に包む腕
からころと外湯帰りの流れ星
七輪に強目の燠や秋刀魚の眼
北窓を閉づれば小さきチャイム音

山の幸

曲淵徹雄

檜柱に当つる指矩秋の風
色鳥や水琴窟のささめごと
茸売訛ゆたかに山自慢
釣瓶落し今来た道が遠くなり
後戻りできぬ秒針秋の雨

田 仕 舞 川 崎 道 子

見覚えのワイシャツを着る案山子かな
台風にその身震はす御神木
ラストシーンのやうな照葉の並木道
田仕舞の煙むらさき暮れなづむ
秋入日磴はまつすぐ海へ落つ

霜 の 声 池 田 雅 夫

霜月の日射しよそよそしき窓辺
古本の旧字につまり霜の声
頑なに黙する美学大冬木
猪をがんじがらめにして担ぎ
極月の暦の透くる壁の染み

蓑 虫 大 塚 茂 子

鮮やかに落葉かつ散る古墳塚
老松の手入れの済みて男前
山茶花の斯く咲き散りし駄小径
蓑虫やぶらりゆらゆら夢もある
肌寒しホットミルクに薄き膜

地 芝 居 原 田 秀 子

隈取りも堂に入りたる村芝居
地芝居や巡礼お鶴に涙して
口 跡 も 玄 人 蹴 村 芝 居
くりぬかれ呵呵大笑の南瓜かな
市長賞つけて胸はる南瓜かな

ひとときの秋 河 野 はるみ

発車ベル無人の駅の照紅葉
秋日和税額査定けせらせら
無花果や薄皮そつと母の乳
湖畔の宿夜霧しばしの隠れ蓑
月覆ふ雲の明しや秋惜しむ

馬 走 る 内 田 恵 子

白くなるまでこぬる水飴秋澄める
深入るな紅葉山には鬼女のゐる
恐竜のやうなクレーン星流る
草原を疾走の馬空澄めり
流れ星ひとこぶ駱駝砂漠ゆく

みちのくの旅

原田自然

金堂にひとときは紅葉が朱を放つ
高原の紅葉の山並八甲田
「円満」と掲げる額や薄紅葉
大小の島にうつとり紅葉風
溪紅葉団子行き来のケーブル籠

木の葉髪

飛永鼓

無人駅に降り立つ終電そぞら寒
焼芋を食みて戦中の話など
椎の実を拾うて縄文の町に住む
停年の無き農業や木の葉髪
連れ添ふて六十年や木の葉髪

後の月

石川理恵

「だあれだ」と目隠しさるる花野かな
ねだられて林檎のうさぎ幾匹も
終バスの灯の秋雨にけぶりをり
神楽坂の横丁にゐて暮の秋
見え隠れして慕はしき後の月

シャンパン

西浦千枝子

鯛雲 天守閣へはあと五段
ハイヒール脱ぎお橋廊下を姫歩き
シャンパンの泡を楽しむ星月夜
焼きたての秋刀魚へワインたつぷりと
柿落葉踏めば楽生む母の家

照紅葉

上戸千津子

窓華やか透ける狭庭の照紅葉
松茸の香り頂き素通りす
城址に佇てば虫と侍鳴き声す
六甲道大樹に縋り蔦紅葉
宮参り神鼓に泣くや秋の声

ライトアップ

野口和子

熊注意 大き立札湖畔宿
银杏紅葉老夫ひとりの古ベンチ
飛行機の明かり横切る冬の月
オレンジの風吹き抜けて柿たわわ
冬桜ライトアップの山の綺羅

ビーバームーン

福田 千春

冬満月隠し事など晒されて
栗の黄が映ゆる益子の飯茶碗
「ご自由に」と一箱の柿大家より
クロゼットにタグ付きの服冬浅し
秋惜しむ各駅停車の日暮どき

紅葉

松山 清子

村里はひっそり寂びて柿熟るる
崖紅葉土器しんと吸ひ込まれ
古刹の床磨きぬかれて照紅葉
半纏の庭師きびきび松手入
雲梯にぶら下がる子ら秋夕焼

あなうれし

熊倉 千重子

虫時雨湯船にゆるり身をほぐし
バスの席譲られ微妙秋惜しむ
あなうれし里の甘さの柿届く
引越しの後に残りし次郎柿
朝寒や廊下光らせ修行僧

チャルメラ

松島 寛久

チャルメラに知らぬ同志が夜食とる
「あつ流れ星」指さす先のウクライナ
蓮枯るや去るもの去りて季節早
椎の実や天辺に声餓鬼大将
流星や父母より給ふ生と死と

湯冷めして

田中 章嘉

湯冷めして慌て取り出す秋裕
干柿や肌を晒して星月夜
薯蕷汁搗り手は後の痒みかな
餌求め里中出づる小熊かな
新米のむすびを持たす動物園

冬は鍋

瀬戸 雄二郎

野菜だけ残り鍋会果てにけり
北上の河原をうむる芋煮会
おしまひはおじやとなりぬ一人鍋
さしむ階段上りて食ぶる桜鍋
きりたんぽ裏山から風下り来る

季音花

浜離宮 石田慶子

つきだしは今塩茹での落花生
割烹着の似合ふ妻ゐて菊膳
山粧ふ婚活バスのハイキング
山粧ふ夢の後先城の跡
秋惜しむ水路で向かふ浜離宮

柿落葉 渋谷きいち

綿虫乱舞遊行柳に人消ゆる
辻を抜く音なき音や神渡
豪農の揉める跡取り柿落葉
柿落葉弄ばれて吹き溜り
柿落葉踏んで裏木戸影ほうし

月夜茸 染谷風子

名画座に「駅馬車」かかり初さんま
声かぎり妻恋ふ鹿よ神の庭
襟正す釣瓶落しの九段坂
捨て鐘を数ふる釣瓶落しかな
美しきものに罪あり月夜茸

新米 横山君夫

十月の高く積みたる新書かな
新米を指躍らせて研ぎにけり
きのこ狩息せき切つて駆け来る子
ダム底に沈みし村や秋の声
日没の刻の駆け出す暮の秋

般若の面 笹本啓子

観月や般若の面の奥座敷
烏瓜鬼火に見ゆる夕間暮れ
濁り酒大漁祝ふ長の家
敗荷や生涯閉ぢし沼の面
トンネル抜けて粧ふ山が全面に

苜 藁

保坂 翔太

広重を偲ぶ掛茶屋とろろ汁
四十島田の心配りや宿の秋
天領の閑所の跡や桐一葉
朗々と詩吟の女将菊贈
古民家や苜藁見ゆる暮の秋

神の留守

梅澤 輝翠

単身赴任今日は二匹の秋刀魚焼く
急がねば杜を綺麗に神の留守
敗荷を包む日輪やはらかし
賑はひ去りて灯明浮かぶ露時雨
キスオブファイヤーをんなひとりの宵月夜

菊 日和

越田 栄子

園児らの迎へ太鼓や村芝居
台詞とび黒衣耳打ち村芝居
イベントはおばけ南瓜の重さ当て
天麩羅に藻塩を添へて栗南瓜
抹茶には練り切り添へて菊日和

逃げ去る秋

菅原 卓郎

雲上の城に飮す秋の声
シャンソンの似合ふ街角黄落期
新蕎麦を手繰る古老の江戸訛
うすれゆく爪の黒ずみ秋収め
影法師伸ぶる家路の秋惜しむ

柿落葉

新 曆文

神渡し雲間の月の影静か
巫女の掃く箒目やさし柿落葉
柿落葉色を写さん百羅漢
綿虫の後追ふ道の果てしなく
手を取りて揃ふ歩みの七五三

短い秋終はる

寺内 洋子

陽を返す眼に威厳枯蟪蛄
打ちどころなきままの斧枯蟪蛄
照紅葉古寺の門なる阿吽像
結願や照葉紅葉の鮮やかに
シーツ替へ冬仕度ひとつ終へにけり

秋

池田 珪子

筆筒に差されしままの秋扇
母方の血筋は絶えて白木槿
絶筆の軸の四君子秋の風
薪を割る鉦の音ひびく峡の秋
金風に茶筌ころがる野点かな

烏 瓜

清水 桂子

画仙紙に朱色落として烏瓜
烏瓜おいでおいでと藪の中
憧憬の座禅は未完秋深む
敗荷や公達哀れ平家琵琶
庭下駄の褪せし鼻緒や秋惜しむ

締 太鼓

野村 美子

天高し村中ひびく締太鼓
夕暮の雨降る池の破れ蓮
太筆の座右の銘や秋深し
「笹川流れ」潮風受けて秋惜しむ
野点席お茶と和菓子に秋惜しむ

秋の庭

佐々木 史女

くれなるは寿の色実南天
崖下を波の洗へり石路の花
街灯の点る早さや冬隣
いつからか生え抜き顔の実南天
自販機に熱き茶を買ふ冬隣

菊花展

下川 光子

金銀の札晴れやかに菊花展
懸釜に少女の点前菊花展
秋しぐれ路面電車に乗りかへて
水筒の白湯あたたためて冬はじめ
時雨るるや上る下ると京の町

磨崖仏

西幅 公子

敗荷に真昼の日差をしげなく
色褪せぬやうに生きたし烏瓜
山肌の燃え立つごとく漆紅葉
粧ふ山に頼もしきかな磨崖仏
大相撲締込みにみな個性あり

濁り酒

森

和子

宵闇や早一斉に街灯る
歌舞伎撥ね宵闇の街にぎにぎし
濁り酒瓶を振らずに口当り
濁り酒無口な男喋り出す
濁り酒越中富山のおはら節

秋惜しむ

宮崎

チアキ

静寂を破る一声鶯日和
遅咲きの花にエールや秋惜しむ
張り合うて争ふよりは菊の花
星月夜空へ誘はるる心地
帰路急ぐ太き大根おでん鍋

野分

山戸

美子

自転車の将棋倒しや野分あと
ぶれもせぬ我が身褒めるや野分あと
野分して道路に踊るポリ袋
どんぐりを飾る木札に「準備中」
団栗や旧居はもはや知らぬ家

長生き

綿貫 ひさの

「長生きするよ」くるる一本千歳飴
秋の夜の机の上のグルメ本
古典落語の全集読むや長き夜
陽光は簞笥に届き冬近し
おあづけの山菜取りや秋惜しむ

禅寺丸柿

鈴木 玲子

蘆花邸の歪みガラスにある秋思
城山といふホテルのありて菊膾
かほかくも包み隠さず菊膾
祝ひ日は会席膳よ夕紅葉
掌にちよこんと禅寺丸柿よ

去りゆく時

山岸

久美子

草深き庵を包む秋の声
鬼の子よ巢中にこもり無言かな
敗荷や残照のごと沈みゆく
柿落葉去りゆく時を刻みけり
風や丸ごと揺らす雑木山

照葉 葛城 千世子

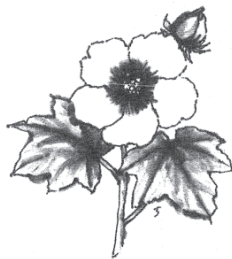
五百年の大樹ヘナビを天高し
水盤の縁に重ねて生く照葉
会議へと木枯一号急がせる
白ピンク会議の面々マスクして
冬空のスーパームーンどこへやら

花芙蓉 高橋 満耶子

売り家に色をそへたる照紅葉
新総理の外交デビュー花芙蓉
十年越しの叶はぬ旅行秋の風
狛犬の阿吽の呼吸松ふぐり
柿たわわ熊の出没あわただし

烏瓜 野平 美紗子

帯締めて踊りの輪に入る秋祭
ネクタイを締めて秋の学園祭
敗荷の池に魚の唯一匹
その昔夫と行きたる山も装ふ
窓越しに見ゆる真赤な烏瓜



現代俳句鑑賞

網野月を

小さき蛾どこからともなく来て止る

宇多喜代子

夏の夜半良書悪書を目で分つ
白壁の秋日一瞬かげりたる

〔俳句〕10月号・白壁より

第一句は中七の「どこからともなく」が句の本質を決定している。句の主人公の「小さき蛾」の属性を曖昧なものにしているようだが、かえって「小さな蛾」の正体を知らしめている。そして作者は、其処に「来て止る」瞬間を目撃したのである。「小さき蛾」にある人物像を重ねているようにも解釈できる。

第二句は座五の「目で分つ」が何を意味しているかであろう。筆者は、作者がこれらの書を読んでいる姿を想像できない。作者は長年の勘のようなもので「良書悪書」を選別しているのではあるまいか。読もうとする書と片付けてしまう書を分別しているのではなくて、強いて言うならば読む順番を決めているような具合ではなからうか。「良書」も「悪書」も良し悪しという訳ではなくて、「この前出版したばかりなのに、彼はまた本を出したのね」くらいの思いでの分別である。そのように解釈するのは上五の季語「夏の夜半」の効果

である。なかなか睡眠に至らない作者の徒然の所作なのである。

第三句は、作者の視線が秋の昼間の一瞬の日差しのかげりを見逃さなかったことを句にしている。「白壁」を一層白く照らし出していた日差しがかげりを見せた瞬間のえも言えぬ美しさを句に収めたのである。俳句表現の王道の句である。

太陽も大豆の莢も爆ぜしかな

中村和弘

〔俳句〕10月号・鶴の声より

諸諺の効いた面白い句と捉えたら良いのであろうか。太陽の燃え盛りは人類にしてみれば爆ぜた「大豆の莢」くらいの認知なのである、ということであり、日常の当り前の中のこととがらである、という捉え方である。だが筆者は一種の恐ろしいような事態を想起してしまった。日常に埋没する人類はいつか爆ぜる太陽に飲み込まれてしまうような恐ろしさである。その恐ろしさは眼前に迫っているのだが、樂觀的意識の中でしか捉えることが出来ない人類なのである。警告句のよいうな緊張感を感じずにはいられない。他に「噴火口ほのかに明し夜鷹鳴く」「天国にヒトはおらずと鶴の声」がある。

睡蓮や水を平たくしてをりぬ

原 雅子

〔俳句〕10月号・夏の日より

中七座五の「平たくしてをりぬ」の主語は「睡蓮」なのである。何故ならば中七の「水を」の「を」は目的を表現する格助詞だからである。一方で、現実には水が平らになる本質＝水平になる本質を有しているもので、その水面に浮かんでいる「睡蓮」も平らになっているのである。水の本質というよりも地球の引力が働いているのであろうが、詩興の世界では、「睡蓮」に花を持たせることが出来るのである。他に「夕立や木賊のみどり濃くしたる」がある。

かざしみる鍵のかすかに錆びて秋

水野真由美

〔俳句〕10月号・木のあいさつより

鍵をかざしてみるなどやはり秋でなくては、しないであろうことである。その部分に共感を覚えるのである。そして秋の陽光の助けを借りて錆がかすかに浮いていることを発見した。作者はその錆に何か思い当たることがあったのではあるまいか、ストーリーがいまだに続いているような予感があるのであろう。

左義長を火は柱にてまる裸

山田耕司

〔俳句四季〕10月号・芋に露より

左義長の景を真正面に受け止めて描出している。その火が柱となって燃え盛っているのであり、左義長の将に佳境の頃

合いなのである。作者はその「火」が「まる裸」だと言いつている。この緊張感は真正面に受け止めたからこそその表現なのである。他に「消さるるも句のはまれなり芋に露」がある。

紫雲英田の仰向けついに無重力

栗原かつ代

〔俳句四季〕10月号・他人より

中七の「田の仰向け」から、「紫雲英」を緑肥として田に鋤き込む様子を描写していると解釈した。中七座五の「ついに無重力」の把握が言い得て妙である。他に「茅の輪ぐるぐる保冷バッグの文庫本」がある。

ポケットに檸檬ヨットハーバーは雨

小林京子

酸漿の網目に透くる小指姫 ガウデイのバシリカ未完秋関くる

〔俳句四季〕10月号・予感より

第一句は、いわゆる句跨りの構成で破調になっている。破調だからと言って決して緊張感を演出してはいない。そのリズムの良さを強調しながら、格好よさを導き出している。第二句はチューリップの親指姫ならぬ酸漿の小指姫である。「網目に透くる」からは、アンデルセンというよりもスウィフトを想起させる。第三句はスクラダファミリアのことである。来年はガウデイ没後百年であり、その記念の年に合わせて完成を予定していることは周知のことである。が完成してしまうのが何とも寂しいような思いも誘うのである。

『水明誌』

を繙く

(水明九月・十月合併号)

田中木江 (「麒麟」所属)

いつまでも続く残暑や安下宿

池田雅夫

壁がうすくて隣の部屋のテレビの音が漏れてくる。扉の立て付けが悪いのかいつのまにか畳を蟻が何匹か歩いている。当然冷房の効きも悪く(そもそも部屋を涼しくする機器が扇風機しかないのかもしれない)、一向に衰える気配のない厳しい残暑が容赦なく部屋に侵入してくる。そんな苦境にあっていっている一人暮らしの学生の暮らしが想像される。

「残暑」自体が秋に入っても継続する暑さを示している季語だから、「続く」とあえて添える必要は通常ない。しかし、掲句の場合は「安下宿」という場面設定と結びつくことで、この措辞が季語の存在感をますます高めているように思われる。「安下宿」を学生、すなわち若者の生活の象徴として読んでよいならば、それに対応する「残暑」の季節とは、夏という若者の全盛が過ぎ、「目にはさやかに見えねども」大人としての人生がもう目の前に迫ってきている時期と言える。それが「いつまでも続く」と述べるこの句の人物は、暑さにあえぎつつも、一方で自身にとつての「安下宿の残暑」がまだ終わらないことを、どこか願っているような気もするのである。

豆飯やほど良き母の塩加減

森下風湖

豆飯の素朴な、かつ濃くも薄くもなく丁度良く味つけされた美味しさが、句のシンブルな調子の良さにも現れている気がする。えんどう豆の鮮やかな緑と、この「塩加減」を同時に想像すると、初夏の食卓の気持ちよさまでもがふわっと脳裏に浮かんでくるような一句だ。

ただし、掲句は「母のほど良き塩加減」ではなく、「ほど良き母の塩加減」としてるところに独自の味わいがある。ほど良いのは母であり、そのほど良い母のつくる豆飯だからこそ、塩加減もまたほど良い——そう読むのも自然だろう。

このように読むことの楽しさは、この句の中には直接的には描かれていない、「ほど良くない」他の家族たちの姿をもいろいろと想像できるところにある。例えば、子に対して叱るつもりがなくてもいついつい言い過ぎてしまう父。あるいは、夏休みの自由研究の理想が高過ぎて結局まとまらない私。そんな家族の熱量を、母の「塩加減」がほど良くやわらげる。「豆飯」はこの家庭にいつも、そしていつの間にか調和をもたらす母の、何気ない優しさの象徴なのである。

山本鬼之介 選

水明集

次郎吉を困らすほどの良夜かな

さいたま 反町 修

鰯雲自然の紡ぐ点描画

竹林の心地よき風葉月尽

正宗の名刀映ゆる夕月夜

新涼のモカを一杯テラス席

競り合ひの山車を揺るがす砂切かな

利根 倉田星歩

遠近の秋燈過り列車行く

梵鐘や普段始まる朝月夜

マドラーを置く手の傍に落花生

秋風の葉擦れの音の静けさや

さいたま 霜多光代

晩秋の椀の屋根や蔵の街
晩秋の魚黒々と泳ぎをり
晩秋の心に住まふ黒き猫

錦木の垣赫々と妹の家

法螺の音の祈りに集ふ水明祭

飛蝗越ゆ二点鎖線の国ざかひ

秋澄んで三昧の音のある法善寺

立て札に「猪注意!法学部」

葡萄棚人に至福の濃むらさき

広辞苑より食み出してゐる一葉

皆川更穂

荒武者の頬に切り傷組みねぶた
ぎこつなき演技の別離蚯蚓鳴く

銀漢や十七音を余技として

薄月や人影招く夜泣石

清爽を点眼するや秋の空

寺町知子

初嵐舳先を揺らす船溜り

雲染むるアラート色や処暑夕べ

こぼれ萩風吹き抜くる仏間かな

松虫やスカイツリーの見ゆる川

青海波刺し跡なぞる夜長かな

さいたま 綿引まりこ

ミシユランの小鉢に萩のこぼれをり
A Iの心はどこかこの秋思
過疎の村棚田守りて新酒酌む
稲刈や黄金波打つ千枚田
実紫夜雨に色の艶めけり

越谷 阿部幸代

鰯雲に誘はれふつと旅心
秋暑し真夜中に開く天体ショー
名子役老いて悪役秋団扇
学舎に続く坂道萩の風
万葉の風の気配や葛の原

ちえんみん

「陳敏」の調べ揺蕩ふ夜長かな

前田夏野

天高し成層圏も突き抜けて

さいたま 飯田忠男

退せし表紙の句集繻く夜長かな

松虫や薄翅擦れり命込め

秋高し舳斗雲が見付からず
こぼれ萩此処は名うての男坂

チンチロリン地球の異変問ひ鳴くや

白萩の磴へ誘ふ女坂

柔孕み武骨よそほふ南瓜かな

姉がゐて徹ちやんがゐて山ぶだう

夕暮の「舍人ライナー」ちちろ鳴く

元田亮一

南祭の亀つつがなく放生会

平塚 丸屋詠子

手水舎に並ぶカップル秋麗

新そばを塩で食せと若女将

墨絵観て残る暑さをやりすごす
赤蜻蛉われも入りたしその中に

林檎囓む太宰の酸っぱさ甘さかな

鎮守の宮の参道わたる秋の風

孫走る爺婆走る秋祭

丸刈りの遺影に祈る敗戦日

正露丸ひとつ転がる暮の秋

田中弘子

犬連れの影ゆつたりと秋の浜

さいたま 岡田宣子

日展や常連画家に黒リボン

御九日や正座崩さぬお囃子手

秋出水赤き長ぐつ仮設の家

夕映えの棚田の稲穂海に垂れ
コスモスの丘に連写の音響く

焼き上げし帯魚太る織部皿

松虫や点つる抹茶の音と協かなふ
付添ひの簡易ベッドや夜の長し

坂登る絡み付くかに残暑光
青青と枝豆茹だり夫を呼ぶ
武蔵野をなべて平らに黍嵐
能舞台の醸しだす美や秋の宵
秋高し棚田連ぬる能登の果て

さいたま 菅原真理

夕さりて刈田に深き轍跡
手鏡に唇映す曼珠沙華
もみづるや京都南座絵看板
地下鉄の不意に地上に望の月
やや寒や皺吹き寄するカプチーノ

さいたま 本橋稀香

秋の灯や妻の湯浴みの音のして
虫の音や子と読む「ロウソクの科学」
彼の人へ赤き糸持て石叩
三陸の遺構の校舎赤蜻蛉
清秋や富嶽は長き裾を曳く

小林京子

若狭 岡本祥子

櫓田にやはらかき風生まれけり
秋草のそこはかとなき佇まひ
約束を律儀に果す曼珠沙華
月さすや成熟早き野菜畑
釣り人や中洲に映ゆる草紅葉

どこからか夕餉の匂ひ今日の月
いつ迄も開かぬ踏切今日の月
道場の弦音つづく今日の月
名月やアメ車にひかるエンブレム
指先でつまむ名月軒の上

石関六弦

潮風に鈴の遠音や秋遍路
処暑の朝熱きコーヒープラックで
追伸に本音を探る夜長かな
開け放つ窓に無月の沖つ風
蟪蛄を睨み睨まれ女の子

さいたま 大熊健司

音立てて積木崩るる終戦日
ふるさとを踊の下駄の踏みしむる
夜食とり二十六時をあたたむる
あて処なく戻る恋文蚯蚓鳴く
無月なり樹上に眠る猿の群れ

上尾 室井早都子

秋澄むや飛行機雲は一直線
秋澄むやブラスバンドは伸びやかに
赤とんぼジャングルジムを鬼ごっこ
散水の虹を越え行く赤とんぼ
楽焼の茶碗に浮かぶ今日の月

三浦真由美

分け入りて伸びし草抜く稲田かな

さいたま 伊藤美津子

暖簾揺れ甘く切なく今年米

秋暑しゴシック体の太き文字
球場に流るる校歌天高し

若狭 山崎郁子

名月や側に寄り添ふ星ふたつ

白萩の雨にこぼれて石畳

自転車の風切る音や秋澄めり

こぼれ萩禿びし箒が捨てられず

秋風や故郷の山よそよそし

裏庭に椎の実あまた山の宿

法師蟬生き残るため鳴きつくす

東京 畑宮栄子

赤とんぼ追ひつ追はれつ二人連れ

秋彼岸これより先は奥の院
空映えし幾多の池塘秋の山

畠中風花

路地裏のままごと遊び白粉花

耳当てて大樹の鼓動探る秋

旅の宿眠れぬ夜の虫の声

秋深みフィヨルド語る子の便り

秋刀魚豊漁黄のくちばしのえらさうに

草紅葉百の草には百の色

刈り残し畦に配慮の虫の宿

さいたま 香田裕誌

川端に並ぶ屋台や温め酒

丹精のぢぢの新米初重湯
新米の高値「越後屋」の仕業か

松村笑風

花街に江戸の趣菊人形

屁理屈をこねる少年青蜜柑

歳月の風情の旅籠虫しぐれ

萩散るや季節がやつと動き出す

朝顔の市に似合ふ娘江戸の華

そぞろ寒番屋にかかる一番星

一服の目は休みなく松手入

白岡 岡本和男

秋の蚊を吐いて古墳の口暗し

月食や天体ドラマ感無量
不可思議な宇宙のリズム赤き月

さいたま 榎本道代

水底の石が顔持つ秋の川

静寂の天空照らす月の緋

曼珠沙華黒猫金の眼を燃やし

一幅の天体名画月天子

底に来て人を恐れぬ尉鷗

天体のアート見飽きぬ明けの月

ほどよく田舎武蔵野線の大夕焼
ちんちろりん口笛吹けば合ひの手を
雑魚寝の宿に青春ありき大文字
霧の中騙し絵のごと若返る
酔芙蓉これが最後と紅をさす

吉川 杉浦千祐

よそ行きの顔のある妻雁来紅
露草が看取る初恋片思ひ
稲妻が縄張りを張る北関東
暴風来ただ待つだけの一夜かな
天高し大声援の棒倒し

さいたま 鈴木藻好

枝豆や恩師の歌ふ武田節
丹波から届く枝豆ことのほか
芋嵐の最中を進む車椅子
残暑の町をつき抜けて行く救急車
秋雨や合羽着て観る能舞台

さいたま 森下美智枝

千切りの生姜利きたる箸休め
頬朱く染めたる張手九月場所
ほの香る義母の夕残の紫紺菊
晴れの日は晴れに疲るる草の花
いつのまに月のかたはらなる航路

大阪 遠藤人美

秋澄むや銭湯帰り下駄の音
秋澄めり上り電車は二時間後
スットンと的を射る音秋澄めり
赤とんぼ良さげな人に止まりけり
赤とんぼここは二軍の練習場

門真宏治

青嶺や池塘を渉る丸き雲
シェイクしてマティーニ干すや水中花
家犬の上席に座す大暑かな
異人館色とりどりの秋の灯に
果てしなく群るる編笠風の盆

さいたま 秋谷風舎

やは羽根をそつとつまむや赤蜻蛉
赤蜻蛉悠悠自然の摂理かな
秋澄むや風を引きつれペダル漕ぐ
龍神の手水ふくみて秋澄めり
新米や皆樂しげに道の駅

西窪弘子

虫の音や故なき怒り鎮めをり
新蕎麦や峠を越えて訪ねけり
残業やいつもの席に今年酒
傾きて夜空見上ぐる案山子かな
少年も立ち止まりしや乱れ萩

播磨 進

桃や桃金の産毛の頬染めて
瞳の中に我映りけり桃熟るる
友見舞ふ梨の重さを確かめり
紅玉や小さき夕日手の中に
ひとふさの葡萄嬰兒のごとく抱く

東京 山中いちい

秋鯖のアレルギー持つ夫哀れ
能面に魂宿り秋に舞ふ

さいたま 小川洋子

黍嵐波引くがごと余韻あり
農道を右往左往や黍嵐
枝豆や叔父の畑へ一目散

華やかな蓑纏ひたし木樵虫

さいたま 川島夕峰

静寂の初手2六歩組の羽織

駒谷行雄

隣家の火事生涯かけし家の秋
空つぼの心を埋むる蕎麦の花
気疲れや優しさ沁むるところ汁
桐一葉空どこまでも青きまま

紅葉纏ふ九体寺の塔池に映ゆ
曼珠沙華花愛づるのみ葉を知らず
送り火や「ごっこ」は一人ではできぬ
部屋の隅仕舞ひ忘れの扇風機

廃屋に暮らしの名残秋の風

若狭 森下風湖

ままごとのおしろい摘んで幼妻
夕化粧「四時に開けます」メール来る

北山建治郎

新米に一筆添へて荷作りす
馬肥ゆる倅三人食べ盛り
洗濯の隠しに椎の実が一つ
秋深し個展チケット二枚買ふ

おしろいの咲いて提灯ともる路地
下り簀手掴み燥ぐパンツの子
落つる魚さらい飛び出る下り簀

園児らの畑掘る声天高し

さいたま 湯浅 和

両の手をついて立つ母秋の暮
をんなでもつい試飲する新酒かな

大阪 海老名ノルン

露草に裾ぬらし行く牛小屋へ
ままごとのジュースは青き螢草
鳶の輪の大きくゆるり秋高し

台風禍静かに作る握り飯
運動会走りて転ぶ幼女かな
吾もまた祝はるる身ぞ敬老日

竹の春無人売場の品薄に

川口 木村小麦

竹の春夫の葉の増えてをり

赤い羽根笑顔の人に並びたる

十六夜や思ひ出したる忘れもの

十六夜謝礼の手紙投函す

秋燕の見せつくるごと急降下

休暇果つこくりこくりの埼京線

落ち合うて彼方を目指す秋燕

鱗雲マラソン人に道譲り

秋涼し二段ベッドの寝息かな

新井のり子

さいたま

石黒由美子

黒葡萄なにか秘密のありさうな

かぐや姫とうさを捜す良夜かな

見上ぐるたび見飽くることのなき良夜

何気なく詩集にのぶる手夜半の秋

路地ひそと三味のつまびき夕化粧

東京 清水美千子

清山尚己

置き去りの太陽の塔残暑残暑

風呂敷の包む新酒や一升瓶

黄昏の街を好むや赤蜻蛉

名月を仰ぐロケット発射場

名月や棒高跳のバーの上

さいたま 平野 楽

木谷葉子

和歌山 嶋田洋子

個人情報や隣何者果はぜる
秋刀魚大漁向う三軒にほひ立つ

新米の重き俵に踏ん張る脚

秋茜低空飛行で庭視察

ふじばかま海を渡りて蝶来たる

「ゲルニカ」の無彩の女終戦日

手水舎の紙垂を掠める処暑の風

斧をふる孤高の闘士いはむしり

王まもる埴輪の武人蚯蚓鳴く

水軍の草生す墓標蚯蚓鳴く

摩天楼とどころに今日の月

自転車の籠にのせたり芋名月

満月をいく度も呼ぶ子ら一列

新米や施設の母に電話せり

新米の七粒落つを拾ひけり

秋澄むや裏表なき人逝けり

奥入瀬の水音跳ねて秋澄めり

頂きは秋澄む空の「トマの耳」

赤蜻蛉しばし滞まる下界かな

赤蜻蛉寮の最寄りの無人駅

七夕や軽トラの荷に青き竹

館内に鶴折る男子終戦日

秋の声水琴窟の間合ひかな

稲雀ひと足先に出来を見る

秋晴や送電塔のそびえ立つ

受付を三人増やす梨のまち

物言はぬ者に延延秋彼岸

「坊ちゃん」と言ふ名の西瓜辞書を解く

朝霧や生涯暮らす峡の里

一品を減らす秋刀魚や卓の位置

風の駅山の駅過ぎ雪の国

匂ふ様夢のあとさき細雪

冬桜前向きになる里の風

処分する小さきメモと古暦

冬の夜雨雨止まぬ八代亜紀

「あのあれ」で過す幸せ今年米

秋の暮波にころがる石の音

日の匂ひ纏ひて帰る運動会

紺碧の海を旅する大秋刀魚

雑踏に行き交ふ孤独秋の夕

さいたま 阿部貞代

若狭 西川昭代

所沢 関根千恵

さいたま 羽島秀子

葡萄持つ薬師如来や大善寺

黒葡萄バツカスの手にゴブレット

黒葡萄未熟なままの粒見えて

かくはしき香り放ちて榎櫨の実

手のひらにずしりと重き榎櫨の実

コンバイン操る老婦豊の秋

豊の秋婦人部バスの出発す

人生は暇つぶしとやきりぎりす

足るを知る日のまた暮るる鉦叩

末の世やとまれ今宵の茸汁

えのこ草子らのからかひ猫は無視

汽車に乗り心の洗濯秋の旅

かまきりの命つさるか草の中

赤とんぼ急旋回し道に落つ

秋の日に花ねむたげにうつむきて

麦とろをかつこむ幸や夫婦旅

買ひ言葉取り消せぬまま栗を食ぶ

つくねんと柿の大樹の実るまま

千曲川渡る車窓に秋夕焼

夫の剥く青き林檎の馥郁と

さいたま 小野町子

上野和子

東京 大島千恵

さいたま 横山礼子

夕暮や追ひつ追はれつ赤蜻蛉
秋澄みて幼子の声弾みをり
たたずみて香の煙や秋澄みぬ
水面には赤蜻蛉のシユールな絵
今年米味覚楽しむ世相なく

さいたま 今西 操

クッキーの小さく芳ばし秋思とも
メイプルを秋のコーヒーゼリーへと
ウエイトレス一人で回す秋の暮
秋の灯やサンドウィッチにお店の名
秋の夜やレトロカフェから令和の外

さいたま 吉川 拓真

蟪蛄に見入り童女の動かざる
四年振り母の生家や蚯蚓鳴く
無月かな歩幅の合はぬ石畳
病院の椅子で夜食のコッペパン
戦争を知らぬ子も老い終戦日

六戸 洋子

南瓜採り戯けて真ぬるカーリング
採り残しの南瓜ころんと夕間暮れ
刃の立たぬ南瓜に夫の出番あり
カメラ向く間もなく消ゆる色鳥よ
繁み揺れ目が合うたやう色鳥と

緒方みき子

気兼ねなく喫煙郷の端居かな
みちのくや無限に続く青田道
白粉花塀越えてまで咲く気骨
宿着にて飽かず眺むる下り簾
廃村に打ち捨てられし崩れ築

北出久美子

秋日和二人の歩み一つへと
秋日和猫の散歩ものんびりと
秋日和「大屋根リング」輝けり
ずんときて包丁こはす南瓜かな
大南瓜ごろんごろんと並びをり

小駒さち子

乃木坂の美術展果て秋ここより
古への逢瀬夕暮れ紫苑の野
秋桜命それぞれ輝きて
無より生れ無に帰す命天の川
落日の細流野菊あふれ咲く

宮代 関谷多美子

名月の赤城山見て出陣す
老木に抱きつく蟬や声かなし
焼き茄子や今茄子紺の色深し
熊穴に入るその前に一仕事
腕を組み恋路を行くや台風裡

東京 桐山 遊童

一推しの力士白星秋日和

千代紙を選ぶ浅草秋日和

青空にドローンの唸る秋日和

スーパーの南瓜を買ふや一人用

食卓にうましほろほろ栗おこは

秋の雨ポストへ通ふ二度三度

毬栗や五個盛る器痛々し

コスモス畑顔うづめては驚かす

秋の蚊や二人で一匹追ひ廻し

爽やかに新作Tシャツ風に揺れ

名月や団子練れても句は練れず

名月や思はせぶりの十八時

新米よやつと会うたがもう持てぬ

仏壇の夫に新米炊立てを

図書館は近くて遠し秋日和

茄子の牛つくりて父母を迎へたり

運動会我が子見つけし緑のくつ下

庭を掃く手を休めたり秋深し

新秋の風香りゆく山の峰

一粒のぶだうかざしてゆるりと食む

さいたま 樋口元美

和歌山 南條きわゑ

さいたま 小田三茅

三森恵子

木犀の風古民家の佇まひ

花八つ手速いタツチの四分音符

運動会テントの席に招き入る

道すがら咲き散る朱色まんじゅしやげ

見上ぐれば何思ふ月の面影

境内に流るる読経秋彼岸

墓石の墓誌見ある吾の秋彼岸

寺を継ぐ若き僧侶の秋彼岸

露草の土手あちこちにかくれんぼ

螢草風の便りに友の計を

暮れ行けば雪洞のやう萋の花

背の丸き母の手に鎌萋の花

フラメンコ赤が舞ふなり葉鶏頭

新米や砥部の茶碗に二人前

鯨の眼はくるりくるくる愛嬌者

ショートステイ二泊三日の夏の旅

アルバムと記憶の貢めくる秋

お彼岸や今年も家族写真撮る

酔芙蓉夢と現実入り乱る

内心はちよつと淋しい曼珠沙華

東京 柳父はる

さいたま 武田重子

菅原靖子

藤沢 小島喜代子

新米を掬ふ父の手黒光り

さいたま 太田 貴

山国を出でて幾年秋の暮

路地裏にわが子呼ぶ声秋の暮

今年米神より先につまみ食ひ

旅先の林檎のかをり郷恋し

鷹の爪花は可憐に小さくて

唐辛子味噌買ふ夫がふらり出て

長き夜にミスマーブルの録画みて

対座してそれぞれすぐす長夜かな

秋場所の小兵力士は京出身

新米や冷めても甘き握り飯

秋の暮帰る影なき中山道

曼珠沙華無言のままの石地藏

彼岸花見送る人なき河原道

孫走る祖父も裸足の運動会

大花野置きて行かるる夢の中

積読をきつちり揃へ星月夜

半地下の窓長くあり秋の園

意見言ひつつ煎餅を割る良夜

横浜 石井妙子

草加 持永喜夫

鬼石 榊原聰子

日帰りのバスの車窓に秋の潮

九十九里浜辺うろろ蚊の名残

九十九里浜の鰯を土産とす

九十九里地球は丸し秋の浜

ゐのこづち吾を待伏せしてをりぬ

鵲の贅遠廻りして子等走る

カンツォーネの声朗朗と大花野

マチュピチュの山色づきて人あまた

秋日和まちを見下ろすゴジラ雲

回廊に昭和の名残り秋日和

宵闇や昔語りの奥座敷

秋の空ベランダ欄干まだ温し

鯖雲の今日の機嫌を思ひやり

秋の暮れ焼酎二杯に頬を染め

鼻の下思はず伸びて栗強飯

放つ末路放たれた末路南瓜煮る

宜しくと何がよろしく栗餡パン

東京 中村まどか

築部真美子

稲野幸子

山下ユリ子

さいたま 糸井しるく

作品鑑賞

山本鬼之介

次郎吉を困らすほどの良夜かな

反町 修

この俳句の主人公である「次郎吉」は、江戸後期の盗賊で、鼠のように身が軽かったので「鼠小僧次郎吉」の異名を取り、盗んだ金を江戸の庶民に施した義賊として伝説化され、歌舞伎や講談などで取り上げられてきた。しかし、実像は盗んだ金を博打や遊興費に使っていたようで、そうと知ると折角の夢が無くなってしまう。次郎吉の職業は鳶職で、旗本や大名の屋敷専門に盗みに入った。その理由は、外は警護が厳しいが中に入ってしまうと警戒が薄く盗み易かったと云うことだ。天保三年五月八日に小幡藩の屋敷に侵入して捕縛され、同年九月十三日に引き廻しのうえ小塚原刑場で獄門に処せられた。墨田区両国の回向院に次郎吉の墓がある。

掲句の季語「良夜」が、次郎吉の命が尽きた九月と重なるのが面白いし、この季語をこのような題材を絡めて詠んだ作者の遊び心に拍手を贈りたい。

梵鐘や普段始まる朝月夜

倉田星歩

「朝月夜」^{あさづくよ}は、角川俳句大歳時記で「有明月」の傍題になっているが、時期的に月の出が遅くなり、それにつれて夜が明けても月がまだ空に残っている状態である。朝の時を告げる寺院の梵鐘の音と有明月が、早起きの作者に「さあ今日も頑張つて行こう」と檄を飛ばしているかに感じたのであろう。実に満ち足りた朝のひと時が過ぎてゆく。

法螺の音の祈りに集ふ水明祭

霜多光代

今年九月二十八日(日)十七時より、ロイヤルパインズホテル浦和の宴会場に於いて、水明創刊九十五周年の記念祝賀会が開催された。主賓の祝辞に続く乾杯の後の団欒の時間を経てアトラクションが始まったのだが、突如法螺貝の掛合い演奏が始まり、皆が「何が始まったのだろう」と驚いた。舞台の袖で吹いているのは水明の網野月を副主宰、宴会場の入り口では、山伏の装束に身を固めた若狭水明会の原田自然氏が厳しい眼差しで吹いている。やがて舞台上上った山伏が、若狭の「鵜の瀬」で毎年三月二日の深夜に挙行される伝統行事の「お水送り」の際の儀式「宝剣の儀」を厳かに披露し、会場から割れんばかりの拍手が鳴り響いた。

この折の興奮覚め遣らぬ気持がこの一句に詠まれたのだと思うが、なかなか心の行き届いた俳句で実に喜ばしい。

広辞苑より食み出してゐる一葉

森下山 菜

広辞苑の普通版でも結構重いが、机上版ともなれば大きさと重さはかなりのものである。普段めつたに使うことのない広辞苑の机上版に桐の葉が挟んである。嘗て何時の日か行樂地で拾ってきた葉なのであろう。年月を経て変色しているが、威風堂々の威厳のある容姿は変わっていない。久方ぶりに広辞苑を使おうとしたら、一葉が「ようー」と自分に挨拶しているように思えた。

薄月や人影招く夜泣石

皆川更穂

有名な「小夜の中山の夜泣石」のほか、日本の各地に夜泣石に関わる伝説がいろいろある。種を明かせば他愛のないものもあるようだが、言葉のひびきからしても何となく薄気味悪い。昼日中ならともかく、夜であればその場を通るのを避けたくなるのが人情であらう。雲がかかってほのかに光る月の夜、仕方なく夜泣石のある道を通ろうとしたら、その側に人影が見えた。あり得ないと思いつつも、もしや、と思う気が一瞬間いた。

松虫やスカイツリーの見ゆる川

寺町知子

迫力のあるスカイツリーを眺められる川としては「隅田川」と「北十間川」が思い浮かぶ。特に後者は、川面にスカ

イツリーの全景が逆さツリーとして映るので実に見応えがある。筆者は、スカイツリーが完成した頃、サイクリングで見物に出掛け、北十間川に架かる橋の上で逆さツリーを見て、その迫力に魅了された想い出がある。

季語から判断して、作者が訪れたのは多分夜であらう。足下近くで松虫の「ちんちろりん」を聴きながら逆さツリーの夜景を満喫したのであろう。

過疎の村棚田守りて新酒酌む

綿引まりこ

何代にも亘って守り続けてきた棚田である。若者は都会へ出てしまつて村落の人口が減り、高齢化が進む一方である。とは言え年寄り達が頑張つて新米の刈り入れも無事終わり、集會場で「新走り」を酌み交わして互いの労苦を労っている。好天の晩秋の昼下り実に和やかな時が過ぎてゆく。

「陳敏」の調べ揺蕩ふ夜長かな

前田夏野

陳敏（ちえんみん）は、中国蘇州生れで上海出身の二胡奏者である。「風の盆」に欠くことの出来ない楽器である二胡の音は、多くの人の耳に馴染んでいることと思うが、掲句にいざなわれ改めて聴いてみて、その哀調豊かな独特の音色に魅了された。作者もさぞかし心豊かな晩秋の一夜を過ごされたことであらう。

夕暮の「舎人ライナー」ちちる鳴く

元田 亮一

「^{とねり}舎人ライナー」は、東京都交通局が運営する新交通システム（案内軌条式鉄道）で、コンピュータ制御によって自動運転されている。荒川区の日暮里駅から足立区の見沼代親水公園まで13駅9.7kmの路線である。距離は短い、全線高架なので見晴らしが良く、ちょっとした行楽気分が味わえるようだが、朝のラッシュ時間帯はかなり混むようだ。

さて、作者が利用したのは俳句の通り夕暮方なのか。蟋蟀の泣き声から感じるのは、ローカルのな長閑さである。

正露丸ひとつ転がる暮の秋

田中 弘子

胃腸病の丸薬である正露丸は、明治時代に日露戦争に従軍する兵士のために開発されたもので、当時の「征露丸」から今の薬名に変わって長い年月に亘り使われてきた。このような歴史的な経路を辿ると、居室で手元を離れて転がった一粒が、高貴な薬に思えてくる。確かに、正露丸一粒で腹痛や腹下りがびたりと治まるのであるから実に大事な一粒である。

学舎に続く坂道萩の風

阿部 幸代

この坂道を上りければ嘗て学んだ学校がある。学生の頃は軽々と上れた坂道なのに、今では少々息切れがする。自分も年取ったものだと思いが上ってゆく。路傍の萩が散りか

けていて、萩を渡ってくる秋風が火照った身体に心地よい。

こぼれ萩此処は名うての男坂

飯田 忠男

距離は短いが結構勾配のある坂である。こんな坂を男坂と言うのだと、納得しながら上ってゆく頑強な男である。

「名うての」の言葉が、その坂のきつさをよく表している。途中に咲いている萩の花が男を元気づけている。

赤蜻蛉われも入りたしその中に

丸屋 詠子

赤蜻蛉の群れ飛んでいる情景は実に牧歌的で心が和む。そして、長い間故郷を離れている人には望郷の念を抱かせる。赤蜻蛉同士が向かい合ったり二匹が追いかけてっこをしたりして、その内いつか夕陽の中へ消えてゆく。

この句の作者も、自分の心の中にこのような想いを宿し、赤蜻蛉の仲間になって一緒に遊べたらと、夢を描いたのであらう。

犬連れの影ゆつたりと秋の浜

岡田 宣子

夏は海水浴や行楽客で大賑わいだった浜辺も、今は空っぽの砂浜である。愛犬を連れて散歩している一人の人物。

俳句の措辞からは男女の何れか判別出来ないが、年齢は若くはなく、中年か老境に差し掛かった人のように想像する。波打ち際に近付いたり少し離れたりと、犬も程よく飼い主と

歩調を合わせている。

筆者の仕事部屋の飾り棚に、西東三鬼さんが葉山の浜辺で愛犬と憩う四つ切の写真額がある。この写真は、往時の俳句総合誌などに掲載されたもので、腰掛けて左拳に顎を載せた和服姿の三鬼さんが沖を遠望していて、それを犬が見上げている構図である。掲句にこの写真を重ねると、この句の人物が三鬼さんであるかに思えてきた。

坂登る絡み付くかに残暑光

菅原真理

近年は六月から九月まで、照射熱で木の葉が枯れるような異常な暑さが続いていた。本句の残暑光はそれを如実に表している。日蔭で休んでいてもかなり暑いのに炎天下を歩き、しかも坂道を登ってゆくのだから、その厳しさは極限に達しているよう。中七の「絡み付くかに」がこの状況を見事に活写している。

秋の灯や妻の湯浴みの音のして

小林京子

夕食の後しばらくして夫が居室で本を読んでいる。すると浴室からやや荒々しい音が聞こえてきた。何かで妻の心が乱れているのかと思う夫である。夫婦喧嘩をしたわけでもないのに……と考え込む。

はてさて、よくもこんな複雑な俳句を詠んでくれたものよ、京子さん。

いつ迄も開かぬ踏切今日の月

石関六弦

幾つかのの鉄道路線が平行している踏切であろうか。丁度各列車の通過時間が重なりなかなか踏切の遮断機が上がらない。苛々しながらも待つしかない諦め、皓皓と下界を照らす名月仰ぎ見て心を安んじている。

ふるさとを踊の下駄の踏みしむる

室井早都子

久しぶりに故郷に帰り盆踊に参加した。娘時代に還った気分では踊ってはみたものの、なかなか昔のような流暢な所作にはならなかった。でも汗をかいて思い切り踊った後の気分は最高であった。下五の「踏みしむる」に作者のその日の歓びが凝縮している。

もみづるや京都南座絵看板

本橋稀香

京都の紅葉の名所を巡った後、四条河原町へ出て土産物を買ひ、京都駅へ向かう作者であろうか。四条大橋を渡る手前の南座に公演中の芝居の絵看板が出ている。時間が迫っているのだからと見て、後ろ髪を引かれる思いでその場を去ったのだろう。

櫓田にやはらかき風生まれけり

岡本祥子

稲刈りした後の切り株にもう櫓が生えてきた。その逞しい生命力に今更ながら感激する作者を櫓田を渡る風が包む。

水琴窟

(水明集十一月号鑑賞)

池田雅夫

首傾げ歌ふスターや鳳仙花

松村笑風

「首傾げ歌ふスター」、すなわち島倉千代子である。昭和の時代に美空ひばりと共に一時代を築いた歌手であり、誰もが知っている。その代表曲の「鳳仙花」。首を左右に傾げながら歌う島倉千代子の姿が目につかぶ。亡くなって数年経つが、直後なら追悼句として称讃されたことであろう。

分蘖の実りの予感青田風

阿部貞代

田植えが終わり、青々と生育する稲。そのころになると、「分蘖」といつて株元が枝分かれしてふえる。そうして田の面を被い尽くして「青田」となる。その逞しさに「実りの予感」として悦んでいる。そこには豊作の期待と願いが込められている。今年の米騒動を嘆いているのかも知れない。

着崩して歩く女の暑さかな

吉川拓真

夏に用いる涼しい着物は、絹、麻、木綿などいろいろあり、「夏衣」とも云われる。近年の暑さは異常で生命の危険さへ危惧されるほど。素材がいくら涼しくとも堪え難いものである。暑さで帯をゆるめたせいで「着崩れ」てしまったのだ。

夕端居夕日に黒き津軽富士

大熊健司

暑さからのがれるために縁先などに出て外氣にふれ、のんびりと庭などを眺める「端居」。所は青森。「津軽富士」といわれる「岩木山」が聳えている。弘前市か黒石市の近辺であろう。真つ赤に燃える「夕日」に「黒き津軽富士」が浮かぶ。「夕日」を「入り日」あるいは「落暉」ではいかがか。

明易の参禅清し坊泊り

石黒由美子

「参禅」は禅の道を修業することであるが、「坊泊り」であるから体験としてのものであろう。宿坊に泊まり座禅を体験し、心身共に清らかな朝を迎えたのだ。無心に座り続けることで日常の煩わしさが吹っ切れる。早寝早起きを実践し、「明易」の清清しさに感動しているのであろう。

寒流に乗りて我が家へ初秋刀魚

小駒さち子

「寒流に乗りて我が家へ」と詠み、「秋刀魚」が自身の意志で来たかのようなところに醍醐味がある。「寒流」すなわち「親潮」は千島海流とも呼ばれ、塩分が少なく水温が低い。プランクトンが豊富で、南下とともに秋刀魚を連れて来る。

大花野休耕田を隠しをり

飯室夏江

農業の高齢化、後継者不足などで「休耕田」が次第に増えてきている。休耕田はあつという間に草に被われてしまう。しかし、そこに蔓延る草々が花を咲かせているのだ。「大花野」に憐れさはなく、「隠しをり」に前向きな姿勢がみえる。

焼き秋刀魚骨美しく夫の皿

羽島秀子

魚を食べるときに邪魔になるのが骨。小骨の多い魚はきれいに食べるのが難しい。皿の縁に小骨や鱗をおくのも仕方ないこと。「焼秋刀魚」を食した「夫の皿」はきれいに片づき頭と背骨だけ。育ちや性格が現れるというのも頷ける。

信濃路の空の青さや山滴る

大神満智子

山の国「信濃」は標高が高く、避暑地として有名である。空に手がとどくほどで、その青さに驚く。その青さに負けぬほど山々も蒼い。その夏山の雄大さに抱かれているのだ。比喻的ではあるが「山滴る」の季語がびたりと決まっている。

ごろごろと雷様の落とし物

桐山遊童

楽しい句に思わず笑ってしまった。落雷の直撃は恐ろしいものだが、なぜかほのぼのとした気分にはせられた。きつと落ちる心配のない遠雷であろう。「落とし物」が言い得て妙。

夕立や供花の乾びし六地藏

山下ユリ子

仏教では「六」の数に深い意味がある。六字の番号として浄土宗の念仏の「南無阿彌陀仏」。一切衆生の死後の世界の六道など。「六地藏」にはそれを救い導く使命があるのかも知れない。乾びた供花を労る「夕立」。「乾ぶ」で七字に。

須佐之男の眼光猛きねぶたかな

伊藤美津子

八岐大蛇（やまたのおろち）を退治した、あの「須佐之男命（すさのおのみこと）」である。「眼光猛き」と誉め称えてそれが「ねぶた」のことと、みごとに締め括っている。青森のねぶた祭りは巨大な灯籠を山車にして引き回す。

髪一本顔にまつはる残暑かな

穴戸洋子

今年の暑さは記録的な暑さであった。連日の猛暑日に熱中症で倒れる人も多かった。秋の声を聞いても暑さが残り、脱水症状にも気を配る。たとえば、「髪一本顔にまつはる」だけでもうつつうしく暑さを感じる。些細なことの発見に拍手。

時折にここちよき風残暑の夜

糸井しるく

いつまでも残る暑さにうんざりしている。時折吹く夜風が「ここちよき」なのであろう。「残暑の夜」の風に吹かれて精気を養っているのだ。やがて清朗な秋となるであらう。

網野月を選

山紫集

磯桶も野積みにされて秋の潮

原田秀子

落日の迅さに満つる秋の潮

岡田宣子

拾ひ上ぐる流木軽ろし秋の潮

田中弘子

秋潮や波の下より貝の声

染谷風子

秋潮の鋼の如く起ちあがる

小林京子

烏帽子岩を洗ふしぶきや秋の潮

丸山マスマ

しろがねに水尾染め上げて秋の潮

正木萬蝶

秋の潮骨組残す海の家

石田慶子

賑はひし白砂の浜を秋の潮

反町 修

腸にずしりと紺の秋の潮

清水桂子

八十代迫まりつつあり秋の潮

榊原聰子

寄するたび足裏擦る秋の潮

笹本啓子

ひたひたと寄せ来て淋し秋の潮

穴戸洋子

秋の潮友遺言の海に散る

渋谷さいち

秋の潮憂き事全て丸飲みす

嶋田洋子

秋潮の削る巖の見えかくれ

下川光子

九十九島の影抱きつつ秋の潮

霜多光代

——以上特選

阿伝なる夫婦すなごり秋の潮	菅原卓郎	「椰子の実」をひとり愛唱秋の潮	西幅公子
秋潮の夕日飲み込み佐渡の海	菅原真理	秋の潮テトラに寄する波ばかり	野口和子
秋の潮水面を照らす屋形船	杉浦千祐	クルーズ船や潮風受けし秋の潮	野村美子
秋潮の浜を駆け行くアスリート	鈴木藻好	秋の潮鳴門の渦の大きさ	畑宮栄子
攫はれし砂のお城よ秋の潮	鈴木玲子	一人去りだあれもゐない秋の潮	樋口元美
津免田貝拾ふ秋潮香る野に	関谷多美子	秋の潮浜に忘れし三輪車	日高道を
秋潮や値上げ値上げの波襲来	高橋満耶子	流木の忘れさられて秋の潮	檜鼻ことは
秋潮の松島巡る遊覧船	武田重子	風を切る大漁旗や秋の潮	平野 楽
秋の潮鳴門の渦を下に見て	田中章嘉	流木に座す影ひとり秋の潮	福田千春
秋の潮人影さがす鳶の舞	寺町知子	秋潮や平家を偲ぶ壇の浦	保坂翔太
秋潮の浜に拾ひし丸い石	飛永 鼓	相添ひし歳月の澱秋の潮	前田夏野
不器用で戸惑ひ迷ふ秋の潮	南條きわゑ	秋の潮島の岩屋を窺へり	曲淵徹雄

残照を背負ひ寄せ来る秋の潮	山岸久美子	流水を拾ふ少年秋の潮	阿部幸代
秋の潮の婿の釣果やカルパッチョ	森下美智枝	秋の潮寄すとも消ゆる夢の跡	新 暦文
汝と吾に踝四つ秋の潮	森下山菜	秋潮や行きては戻る離れブイ	秋谷風舎
秋の潮拾ひし貝を耳に当て	森 和子	秋の潮航跡一路水平線	青木鶴城
るいるいと海月置き去る秋の潮	本橋稀香	龍笛の水面流るる秋の潮	綿引まりこ
秋潮に乗りてハングル流れ着く	元田亮一	秋の潮第三声の中国語	吉川拓真
舟揺れて寂し手ぶらの秋の潮	持永喜夫	秋の潮砂のお城は一人用	横山礼子
沖ノ島に青を極むる秋の潮	室井早都子	船内に流るるワルツ秋の潮	横山君夫
停戦に歓喜溢るや秋の潮	宮崎チアキ	秋の潮鮮明に立つ大鳥居	湯浅 和
帆を降ろし秋潮のまま日本丸	皆川更穂	秋潮の置き忘れたるシーグラス	山中いちい
七転八起の思ひを胸に秋の潮	丸屋詠子	瀬戸内の船着くチャイム秋の潮	山戸美子
棧橋や舳ひに軋む望の潮	松宮保人	秋の潮大漁旗のどよめきて	山下ユリ子

南溟より還らぬ父よ秋の潮

荒井 俱子

秋潮や夕日の照らす深みどり

遠藤 人美

淡き闇靴音ひとつ秋の潮

新井のり子

野の草のここまで寄せて秋の潮

大場 順子

秋の潮やどかり今は引越中

飯田 忠男

親子三代それぞれの秋の潮

川島 夕峰

夕日さすオノコロ島に秋の潮

池田 珪子

ミサンガを離岸流に乗せ秋の潮

北山 建治郎

秋潮とがつぷり四つの防波堤

池田 雅夫

秋の潮二人で波を追うた日よ

熊倉 千重子

秋潮や大観音は目を細め

石川 理恵

鱸網を激しく曳くや秋の潮

倉田 星歩

外国の船すれ違ふ秋の潮

石関 六弦

秋の潮軍艦島の波たかし

河野 はるみ

九十九里地平線抜け秋の潮

糸井 しるく

秋潮の渦ごうごうと鳴門かな

小駒 さち子

岩礁に飛び散るしぶき秋の潮

井上 玲子

秋の潮いま日の登る夫婦岩

近藤 徹平

空耳か縄文人の声秋の潮

内田 恵子

竿垂らす深く深くと秋の潮

梅澤 輝翠

追憶はすべて美し秋の潮

梅澤 佐江

山紫集作品評

網野月を

磯桶も野積みになされて秋の潮

原田 秀子

「磯桶」だけではないのだ、蛸漁の壺も積まれ、背後には網も干してある。上五の「……も」からいろいろと連想が広がるのである。「磯桶」から想像を広げると、然程に大きな浜辺ではないかと思われる。「磯桶」は徒人海女（カチドアマ）または桶海女（オケアマ）と呼ぶところの漁具である。船を使用せずに浜から漁場まで泳いでいく海女である。「磯桶」はスカリと呼ばれる袋状の網などとともに用いられる、ものの本にある。作者は何処でこの浜辺を見ることが出来たであろうか。その時は秋であつたのである。

落日の迅さに満つる秋の潮

岡田 宣子

日の落ちる速さと潮の満ちる速さとを比しているように解釈した。共に地球上の自然現象で、同じリズム感を有している、ちょうど同じ速さで日が落ちて、ほぼ同じ速さで潮が満ちてくる、ということのように思うのである。作者はその同じ速さに気づいたのである。そしてまた、同調することによって緊張感が緩和されて、自然に包まれる心地よさに自然の偉大さ

のようなものを作者は感じたのではないだろうか。上五中七の「落日の迅さに」が「満つる」の副詞的修飾語になっているところが実に巧い。

拾ひ上ぐる流木軽ろし秋の潮

田中 弘子

「秋の潮」の兼題で、「流木」のお投句がいくつかあつた。その中で「流木」の本質を「軽ろし」と言い当てたのは優れていると考える。「流木」には他にもその本質をいうことの出来る措辞が多々あるが、作者は「軽ろし」に集中した。普通ならば二兎を追つてしまいかねないところである。一つに絞りきれたことが成功を導きだしているし、将に俳句的なのである。

秋潮や波の下より貝の声

染谷 風子

座五の「貝の声」はいつたい何者なのであるか？得体のしれぬ何かの音声を「貝の声」と聞き取ったのか、風と波の音を「貝の声」と譬えたのか、心象的な内容なのか。何れにしても大変にロマンティックな表現である。「貝の声」そのものは、ふつうは存在しないのであるから、ロマンティックを超えて夢想的でさえある。上五を「……や」切れにして転換したことで句の立体的な構成が実現したようである。

秋潮の鋼の如く起ちあがる

小林 京子

いわゆる直喻の表現を用いた句である。その「鋼の如く」がいかに秋の潮の一面面を捉えている。つまり、人によつてもしくは句によつては穏やかな秋の潮、寂莫とした秋の潮、

などいろいろに捉えるのだが、作者は「銅の如く」と捉えたのである。無論、実景からの着想であろうが、秋の潮の捉え方それだけでも作者の個性というものは引き出されるものなのである。叙景ならば客観的であるという訳ではないのである。同じ景を見ていろいろに見方が分かれるところに、自然と作者のオリジナリティーが発揮されるのである。

烏帽子岩を洗ふしぶきや秋の潮

丸山マスマ

この景はまさしく「秋の潮」でなければならぬ。春夏冬の景では「洗ふ」も「しぶき」も死んでしまうからである。作者の感性の顕敏さが発揮されている。筆者は早朝の清新な空気を想像した。もしも早朝の景であれば、この「秋の潮」は満ちてくる潮でなければならぬ。「烏帽子岩」の裾が少しづつ高みまで洗われていく様を見つめる作者がそこにいるのである。

しろがねに水尾染め上げて秋の潮

正木 萬蝶

「秋の潮」にしてはポジティブな句意であり、景である。夏に比して、凋落の趣が「秋の潮」にはあるものの、水流が航跡かは分からないのだが、「水尾」の躍動感と明るい日差しとが描写されている。「染め上げて」という表現からは、何か光が感じられて午後の匂いがするのだが、筆者だけの解釈であろうか。

秋の潮 骨組残す海の家

石田 慶子

作者は実際に見てきて確認したのであろう。「骨組」とあ

るので、それほど立派な「海の家」ではないだろう。簡単な組み立て式の「海の家」を想像した。中七の「骨組み残す」のある意味、素っ気無いほどの言い回しが「海の家」の様態を確実に読者に想像させている。

この句の「秋の潮」は引き潮であろう。

賑はひし白砂の浜を秋の潮

反町 修

中七の「……を」の表現から、座五の「秋の潮」のあとに省略があることが想像される。筆者は「秋の潮」を主語として動詞を補って解釈してみた。「秋の潮が満ちたしている」と言ったところか。読者によつては別の動詞を補うこともあるであろう。上五に「賑はひし」があるので、「秋の潮」を擬人法的用法の主語に擬えて、「賑わっていた白砂の浜を、今となつては秋の潮が独り占めしている」くらいに省略を加味して解釈しても良いかも知れない。

腸にずしりと紺の秋の潮

清水 桂子

上五中七の「腸にずしり」の措辞は普通固体の表現に使用されるものであろう。しかしながら掲句は視覚的イメージとして捉えた「紺の秋の潮」の描出に使用している。ということとは「腸にずしり」は心象的な表現ということになるであろうか。それにしても「腸にずしり」は「紺の秋の潮」の本質に迫っている。文学は真理に迫るものという命題を遺憾なく發揮している句である。

俳誌望見

梅澤輝翠

「葉」

令和七年十月号 通卷一〇三号
主宰 松岡隆子 発行所 東京都西東京市

平成二十九年一月立ち上げ四月創刊 師系 岡本 眸
岡本眸の提唱し続けた「俳句は日記」を理念とし「自然との関わりの中で日々の暮らしに生ずる哀歓を詠むこと」を指針とし、互いに高め合い良い俳句を詠み合っていきたい。月刊。

主宰句「思ひまた」十二句より五句

みんなるて秋蝶もゐて師の墓前
師の声をおもへば供花の百合開く
思ひまたつくつく法師鳴くばかり
秋風の坂をみんな下りて行く
鎌倉の大路小路や秋の風

「葉」ミニ吟行会が眸先生の墓参を以て再開。鎌倉駅には十九名、県外からはホテルに前泊しての参加。一人ずつ線香を手向け祈る。それまで蕾だった供花の百合が開き始めた時、先生の明るいお声が聞こえたような気がした。

参加者の半数の方は眸先生のご指導を受ける機会のなかった方である。香煙が消え、つくつく法師が鳴きしきるなか静かに追悼の時間が流れていった。―添文より―

蘇芳集 十三名 各七句より五名

見るからに小学校の夏休 青山 丈
襖絵のみづうみ碧く菊の酒 清水裕子

入院を前に師へ文梅雨月夜
柏餅掟のごとく置かれけり
働いて何を忘れむ雲の峰
下平直子 富田正吉 別府 優

繆集(一) 松岡隆子選 三十二名 各五句より五名

よく晴れて越中平野出穂期
ゆつくりは私の歩幅雲の峰
下町やころ合に咲く蓮の花
浅草を逸れて土用の風の中
棧橋を雲の影ゆく晩夏かな
平沢千恵子

繆集(二) 松岡隆子選 三十四名 各五句より五名

さまざまな節目を生きて遠花火
大空の闇ありてこそ江戸花火
紙を切るナイフの音や夜の秋
迎へるも送るも一人芋殻焚く
海青しあをしと夏帽押さへつつ
岡 美穂 五十嵐かつ子 福島三枝子 梅澤惇子 珍田千代子

葉集 松岡隆子選 四十四名より二名

御飯殿の屋根に乾きし夏落葉
初蟬や眼鏡かけて聞き直す
安達みわ子 鈴木富代

ジュニアの部 二名 二句より 二名

スパイスはだんらん盆休みのカレー 高一 二宮幸穂
休暇明け介護施設のボランティア 高一 橋本鷹治

特集・若槻妙子の句集「花のころ」を紹介してしまいたいと思えます。すでに卒寿を迎えられた作者にとつての約四半世紀にわたる第一句集。師、松岡隆子氏による序文に原点は高校一年での万葉集であり、大学時代の英詩であったと。

末黒野のいまだ熱きを歩みけり
迷ひなき一本道や大花野

句集喝采

菅原卓郎

◆伊藤恭子「新町橋」

彦岐坂書房

著者略歴 昭和二十年埼玉県浦和市生れ。平成十年「野火」入会。平成十六年野火新人賞受賞・同人。平成二十六年野火青霧賞受賞。令和元年第五十回埼玉文学賞準賞受賞。令和六年第五十五回埼玉文学賞準賞受賞。俳人協会会員。

新町橋のたもとのマンションに友が居り春ともなれば古利根の桜を愛でに訪れる。四季を通じ散策には適した川である。

門松の竹の切つ先朝日差す

類にくる利根の川風蓬摘む

じやがいもの花や午後からの差して

第一句、新年のめでたい句。門松の鋭い切り口を刀剣の切

つ先に見立て新年の凜とした朝を表現している。門松に眩し

い朝日が当たり今年もいい年になりそう。第二句、利根は

古利根の事であろう。蓬を摘める河川敷があり、春先には心

地よい川風に頬を撫でられながら過す一時。蓬の香りが漂

ってくる。草餅にしたら無かし旨い事であろう。

年新たゼロに始まる歩数計

大寒の木綿豆腐の布目かな

秋高し足踏ん張ってコーラス部

涼しさや造酒屋の蔵の窓

第二句、早朝の湯気で曇る豆腐店の景。大寒の水に晒され
た真白き豆腐の肌に木綿の跡が残る。その布目こそが木綿豆
腐の矜持である。豆腐は木綿に限る。第四句、酒蔵の壁の厚
さは真夏日の暑さをも撥ね付ける。作者は多少窓を開けた酒
蔵に涼しさを感じた。蔵の持つ恒温性を涼しと言う季語を用
い表現している。冷で一杯所望したいところだ。

◆伊藤政美「一切衆生」

菜の花叢書

著者略歴 昭和十五年三重県四日市市生れ。昭和三十六年山口い
さをに師事。昭和三十八年「菜の花」創刊に参画。平成十五年「菜
の花」主宰。三重県文化功労賞受賞、四日市市文化功労者表彰。現
代俳句協会会員。東海地区現代俳句協会顧問。

作者十一冊目の句集。集名の「一切衆生」とは生きとし生
けるもの、奈良長谷寺での吟行句「冬天や一切衆生青の中」
より命名。唱和した経文の一節が降って来たとの事。

雲の峰兄弟喧嘩させておく

土になり石に刻まれ敗戦忌

木の実降るいつか芽の出るものもあり

晴れ男などと言はれて花の雨

第二句、戦争の虚しさ儂さを庶民の目線で捉えている。お

国の為に人生を捧げ国内外に散っていった若者が身は大地に

還り名は小さな墓石に刻まれる。又八月十五日がやってくる

第四句、世に晴れ男と称する御仁は多い。花見となれば得

意に吹聴するが当日は生憎の雨。花に免じて赦してやろう。

花筏にもいくつかの難所あり

田が植わり村の境がやわからかに

八月や元人間の神多し

虫の駅次の駅まで虫の闇

第一句、花の筏は見た目は美しいが緩急を乗り越越えて澁み
に辿り着く。人生も紆余曲折が世の習い。第二句、植田にな
ると風景が一変する。苗が水田の粗を包み隠してくれる。村
の境界線など関係ない。これから実りの秋まで村の平和は保
たれる。四季の移り変わる瑞穂の国なればの景。

水明の運営組織（令和8年1月1日より）

主 宰 山本鬼之介

副主宰兼
運営幹事長 網野月を

編 集 長 網野月を

常任運営幹事 網野月を 石井喜恵 日高道を 青木鶴城
菅原卓郎 小林京子 前田夏野

監 事 [水明俳句会及び水明発展基金の会計監査]

山中みどり 新 暦文

運 営 幹 事 大橋廸代 檜鼻ことは 町野広子 近藤徹平

各 部

総務部 [会計、会員に関する管理事務、各行事の受付事務、水明誌等の発送、発行所
管理ほか庶務全般]

部長・日高道を 河野はるみ 岡田宣子
菅原真理

事業部 [水明俳句会各行事・新規会員拡充、ホームページ、俳句教室、会員研修、広
報活動の企画・運営・実行、渉外関係、地方支部会員との連携]

部長・青木鶴城 菅原卓郎 小林京子
皆川更穂 吉川拓真

編集部 [水明誌の編集・発行その他編集関連]

部長・網野月を 前田夏野 香宗我部真
平野 楽

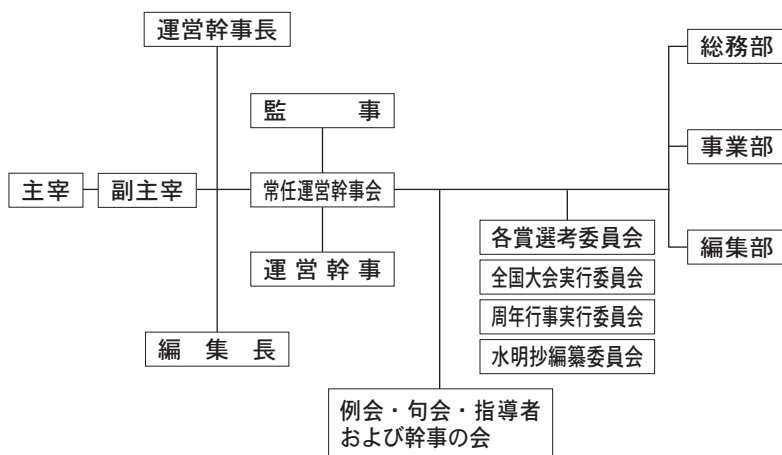
水明発展基金役員（令和8年1月1日より）

会 長 山本鬼之介

幹 事 網野月を 日高道を 石井喜恵 青木鶴城
菅原卓郎 小林京子 前田夏野

監 事 山中みどり 新 暦文

水明俳句会の運営組織図（令和8年1月1日より）



水明俳句会各賞選考委員会（令和8年1月1日より）

水明賞				
主 宰	副 主 宰	石 井 喜 恵	日 高 道 を	青 木 鶴 城
	菅 原 卓 郎			
季音賞				
主 宰	副 主 宰	石 井 喜 恵	日 高 道 を	青 木 鶴 城
かな女賞				
主 宰	〔副主宰の同意を得る〕			
新珠賞				
主 宰	副 主 宰	石 井 喜 恵	日 高 道 を	青 木 鶴 城
	菅 原 卓 郎			
各地区委員：大 橋 廸 代 檜 鼻 こ と は 永 野 史 代 五 明 昇				
鼓笛賞				
日 高 道 を	青 木 鶴 城	石 井 喜 恵	〔主宰と副主宰の同意を得る〕	
山紫賞				
副 主 宰	〔主宰の同意を得る〕			

令和8年主要年間行事等予定表（案）

行 事 名	日 程	誌上案内	開催場所等	主担当	支 援
新春俳句大会	2月1日第1(日)	12月・1月号	さいたま 共済会館	事業部	
例会・句会指導者 および幹事の会	2月1日第1(日)	12月・1月号	浦和CC 第14集会室	常任運営 幹事会	事業部
水 明 忌	2月28日第4(土)	1月・2月号	さいたま 共済会館	事業部	
春の吟行会	3月28日又は29日 第4(土)・第5(日)	1月・2月・3月号	熊 谷	水 明 熊谷句会	事業部
全 国 大 会	6月28日第4(日)	3月・4月・5月 6月号	さいたま 共済会館	実 行 委員会	事業部
水 明 夏 行	(予)7月29・30・31日 第5(水)～第5(金)	5月・6月・7月号	未 定	事業部	
り ん ど う 忌	(予)9月27日第4(日)	7月・8月・9月号	未 定	事業部	
水 明 塾	(予)10月31日第5(土)	8月・9月・10月号	未 定	事業部	

(注) 予定表の詳細未定については、月日・会場を変更することがあります。

本行事予定表にない日帰り吟行会などについては別途に対応する。

※「水明忌」は如月忌（秋子忌）・紗一忌、光二忌を統合した忌日。

令和8年主な兼題等応募句等募集について（案）

募集行事名	誌上案内	応募用紙等	応募締切日	誌上掲載	主 幹
新 珠 賞	12月・1月・2月号	1月号	2月15日	5月号 (六賞発表)	編集部
令和8年全国大会	2月・3月・4月号	3月号	4月15日	8月号	実 行 委員会
水 明 競 詠	6月・7月・8月号	7月号	8月15日	12月号	編集部

令和8年その他の行事について

行事名・募集行事	日時	会場	備考
埼玉県現代俳句協会総会	3月7日(土)	さいたま文学館	当日投句あり(1句)
現 代 俳 句 協 会 総 会	3月21日(土)	上 野 東 天 紅	総会及び懇親会
公園でのはじめて俳句教室	6月12日(金) 6月13日(土)	別 所 沼 公 園 事 務 所	さいたま市報5月号 (24名)
第48回 埼 玉 俳 句 大 会 (埼 玉 現 代 俳 句 協 会)	7月12日(日)	さいたま文学館	講師：大井恒行氏
ねんりんピック彩の国さいたま	11月8日(日)	市民会館おおみや	事前投句及び当日句
現代俳句協会第63回全国大会	11月29日(日)	名 古 屋	各賞表彰及び懇親会

水明例会および各地句会・教室のご案内

(令和8年1月1日)

句 会 名	日 時	場 所	指導・代表	幹事・連絡先 (自宅電話番号等)
第 一 例 会	第1日曜 13時	浦 和 コ ミ セ ン (パ ル コ ・ 10F)	山本鬼之介	菅 原 卓 郎 090-1405-7813 小 林 京 子 080-5099-5167
第 二 例 会	第3金曜 13時	本所ビッグシップ (東 京 ・ 本 所)	網 野 月 を	山中みどり 03-3625-2435 青 木 鶴 城 090-6709-1367
第 三 例 会	第1月曜 13時	京 橋 区 民 会 館 (東 京 ・ 京 橋)	山本鬼之介	五 明 昇 048-858-7155 曲 淵 徹 雄 048-864-4018
第 四 例 会	第1木曜 13時	浦 和 コ ミ セ ン (パ ル コ ・ 10F)	山本鬼之介	石 井 喜 恵 048-683-0801 反 町 修 048-683-9623
第 五 例 会	第3火曜 13時	水 明 発 行 所	山本鬼之介	梅 澤 佐 江 0480-22-4011 河 野 は る み 090-9008-6422
若 松 例 会	第1土曜 13時	京 橋 区 民 館 (東 京 ・ 京 橋)	山本鬼之介	正 木 萬 蝶 045-491-8773 石 田 慶 子 03-3853-2048
関 西 例 会	第3日曜 13時	守 口 文 化 (せ) (大 阪 ・ 守 口)	大 橋 勉 代	森 本 早 苗 078-583-6225
水明鬼石句会	第3水曜 13時30分	藤岡市鬼石公民館 (群 馬 ・ 鬼 石)	野 口 和 子	野 口 和 子 0274-52-3418
水明熊谷句会	第4火曜 13時	熊 谷 市 立 コ ミ セ ン	山本鬼之介	大 塚 茂 子 048-596-1538 越 田 栄 子 048-525-5835
雛 の 会	第2木曜 13時	水 明 発 行 所	石山かつ子	梅 澤 佐 江 0480-22-4011
櫻 蔭 句 会	第2水曜 9時30分	浦 和 コ ミ セ ン (パ ル コ ・ 10F)	丸山マスマ	阿 部 幸 代 048-974-1704
野 菊 の 会	第2水曜 13時	下 落 合 公 民 館 (さいたま・中央区)	椎野美代子	下 川 光 子 048-857-2120
芽 吹 句 会	第3金曜 13時30分	浦 和 コ ミ セ ン (パ ル コ ・ 10F)	山本鬼之介	日 高 道 を 090-2122-1223
柿 の 木 塾	第3金曜 13時	水 明 発 行 所	勉 強 会	茂 木 和 子 048-886-1860
歩 の 会	第1金曜 12時	水 明 発 行 所	勉 強 会	茂 木 和 子 048-886-1860

句 会 名	日 時	場 所	指導・代表	幹事・連絡先 (自宅電話番号等)
りそな俳句会	第2火曜 18時	浦 和 コ ミ セ ン (パ ル コ ・ 10 F)	星 野 和 葉	池 田 雅 夫 048-885-7276 日 高 道 を 090-2122-1223
山 茶 花	第1水曜 10時	本 太 公 民 館 (さいたま・浦和区)	星 野 和 葉	丸山マスミ 048-886-2447
櫟 の 会	第3水曜 13時	常 盤 公 民 館 (さいたま・浦和区)	星 野 和 葉	熊倉千重子 048-832-5455
珊 瑚 の 会	第4木曜 13時	水 明 発 行 所	研 究 会	大 村 節 代 048-862-9658
芙 蓉 句 会	第3金曜 9時30分	六 辻 公 民 館 (さいたま・南区)	山本鬼之介	山 戸 美 子 048-741-1669
た か ん な 俳 句 会	第3木曜 13時	芝 南 公 民 館 (埼 玉 ・ 川 口)	山本鬼之介	青 木 鶴 城 090-6709-1367
き ざ き サ ー ク ル	第3木曜 13時	木 崎 自 治 会 館 (さいたま・浦和区)	五 明 昇	森 和 子 048-832-6565 石黒由美子 090-9145-9291
野 ば ら の 会	第2水曜 14時	さいたま市民活動 サ ポ ー ト (セ) (パ ル コ ・ 9 F)	星 野 和 葉	緒方みき子 048-881-8643
皐 月 の 会	第2金曜 13時	浦 和 コ ミ セ ン (パ ル コ ・ 10 F)	山本鬼之介	皆 川 更 穂 048-865-1824
青 葉 の 会	第3月曜 13時	浦 和 コ ミ セ ン (パ ル コ ・ 10 F)	山本鬼之介	梅 澤 輝 翠 080-3357-5413
新 樹 の 会	第4月曜 13時	浦 和 コ ミ セ ン (パ ル コ ・ 10 F)	山本鬼之介	青 木 鶴 城 090-6709-1367
鶴 川 山 百 合 句 会	第4火曜 13時	玉川学園コミセン (東 京 ・ 町 田)	町 野 広 子	鈴 木 玲 子 044-952-3643
ミモザの会	第2火曜 13時	アートフォーラム あざみ野(横浜)	勉 強 会	福 田 千 春 045-901-6032
若狭水明会	毎月20日	鳥 羽 公 民 館 (福 井 ・ 若 狭)	檜鼻ことは	鳥 羽 和 風 0770-64-1211 鳥 津 初 花 0770-64-1626
水 明 滲 つ く し 句 会	第2土曜 13時	守 口 文 化 (セ) (大 阪 ・ 守 口)	寺 内 洋 子	寺 内 洋 子 090-3164-4923
和 歌 山 水 明 句 会	第1木曜 13時	太 田 東 自 治 会 館	大 橋 迪 代	大 橋 迪 代 073-471-5582 葛城千世子 073-473-0113
神戸大池句会	第2火曜 13時	神 戸 市 立 北 区 文 化 セ ン タ ー (神 戸 ・ 北 区)	勉 強 会	森 本 早 苗 078-583-6225
り ん ど う 俳 句 会	第2木曜 13時	浦 和 コ ミ セ ン (パ ル コ ・ 10 F)	山本鬼之介	染 谷 風 子 048-685-2963 菅 原 卓 郎 090-1405-7813

句 会 名	日 時	場 所	指導・代表	幹事・連絡先 (自宅電話番号等)
俳句の手ほどき 岩 槻 教 室	第1・3水曜 13時	岩 槻 駅 東 口 コ ミ セ ン	山本鬼之介	石山かつ子 048-757-2484
コクーンシティ 俳 句 教 室	第2・4金曜 13時	コ ク ー ン シ テ イ カ ル チ ャ ー (さいたま新都心)	境 延 昭	五 明 昇 048-858-7155 大 熊 健 司 090-6718-5830
あゆみの会	第2・4木曜 13時	下 与 野 コ ミ セ ン	境 延 昭	鈴 木 藻 好 048-825-0158
蝌 蚪 の 会	第3月曜 13時	下 落 合 コ ミ セ ン	網野月を	岡 田 宣 子 048-825-6502 横 山 礼 子 048-831-8016
円 卓 の 会	第3土曜 13時	浦 和 コ ミ セ ン (パ ル コ ・ 10 F)	網野月を	青 木 鶴 城 090-6709-1367
蘭 の 会	第1月曜 13時	浦 和 コ ミ セ ン (パ ル コ ・ 10 F)	網野月を	小 林 京 子 080-5099-5167 秋 谷 風 舎 090-7831-7939
若 鮎 句 会	第2土曜 13時	浦 和 コ ミ セ ン (パ ル コ ・ 10 F)	網野月を	持 永 喜 夫 049-825-7605 岡 田 芳 春 048-837-1169
めだか句会	第4土曜 13時	浦 和 コ ミ セ ン (パ ル コ ・ 10 F)	網野月を	小 田 三 茅 090-9687-1227 寺 町 知 子 090-6560-6827
若 枝 句 会	第4木曜 13時	浦 和 仲 町 公 民 館	保 坂 翔 太	小 山 泰 生 090-1793-6857 浦 川 美 佐 子 080-3723-8011
若 楠 句 会	第4火曜 13時	浦 和 コ ミ セ ン (パ ル コ ・ 10 F)	青 木 鶴 城	石 井 直 子 090-4222-4065 三 浦 真 由 美 090-3982-1410
小 梅 の 会	第4木曜 19時	不 定	日 高 道 を	播 磨 進 090-1251-6134
越 後 の 会	第3木曜 13時	市民活動サポート(セ) (パ ル コ ・ 9 F)	勉 強 会	保 坂 翔 太 090-5996-4629

水明例会

第一例会（浦和）

菅原卓郎
小林京子 報

一灯を残す駅舎や秋時雨
日の名残り風の名残りや秋簾
江戸小紋の薫る工房秋簾
虫の音に田舎言葉の二つ三つ
万屋の煮炊きをかくす秋簾
秋簾揺るれば夫の帰還かと
蕭蕭たる松風透かし秋簾
国宝の山水景図秋簾
虫の声獄舎は高さ塀の中
夕暮の舍人ライナーちちろ鳴く
瀬音聴き酌む一人旅秋簾
秋うらら一番閨の養鶏場
旅装解く宿舎の窓に初紅葉
日の射して色褪せ目立つ秋簾

喜 恵
マ ス ミ
は る み
延 昭
チ ア キ
順 子
以上特選

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

秋簾紺碧の空垣間見る
秋簾半分捲きて独りごつ
新米を銀舍利といひ平らぐる
透くる陽のおぼつかなしや秋簾
大津絵を商ふ婆や秋簾
球児排出二松学舎に秋の声
秋簾まくる奥社の御朱印所
灯の見えて珈琲香る秋簾
廃鉢を見守る如く山粧ふ
栗ごはん寡黙な父の顔ゆるむ
黄の映ゆる笠間の茶碗栗ご飯
栗飯や渋の加減は祖母譲り
栗御飯きくくりきくくりみきくくり
山粧ふ婚活バスのハイキング

チ ア キ
は る み
稀 香
由 紀 子
節 代
千 祐
卓 郎
京 子
敏 江
千 春
い ち い
妙 子
慶 子

第三例会（東京）

五明
曲淵徹雄 報

筑波嶺や色とりどりに山粧ふ
はらからの祝ふ白寿や栗おこは
空の青粧ふ山を際立てつ
深川に烏菟弱時雨の忌
右行けば祖母の待つ家栗ごはん
猿出没の坂七曲り山粧ふ
爽やかや挨拶交はす旅の朝
山粧ふ夢の後先城の跡
遠来の友に山家の栗の飯
山粧ふ天句の棲みか赤の濃し
山粧ふ熊除け鈴を後先に
山粧ふ投資信託乱高下
濁り酒酌み一節の祝歌

亜 弥 子
鶴 城
以上特選
峰 雄
竺 仙
千 春
敏 江
慶 子
い ち い
妙 子
み どり
鶴 城
康 世



峡七戸古老手造り濁り酒
内宮のひときは清し秋あかね
二次会の花嫁豪氣にこり酒
窯変の妖しき器にこり酒
梵鐘や普段始まる朝月夜
小上がりは男の些濁り酒

康世
萬蝶
理恵
星歩
昇

どぶろくに酔ひ猩猩の貌になる
御用心甘き言葉と濁り酒
同期会尽きぬ自慢や濁り酒
漬け過ぎの粕漬けも良しにこり酒
酔ひの末はうやむやにこり酒
落人の秘話残る里濁り酒
式部・納言に想ひを寄する良夜かな
どぶくろを配る聞えの村の婆
濁り酒揺すれば起こる雲疾風

以上特選
順子
千祐
星歩
理恵
雅夫
康世
萬蝶
徹雄
昇

第四例会 (浦和)

身に入むや單身赴任の四畳半
身に入むや雨音深き石畳
盛切の酒に一振り初秋刀魚
身に沁むや遠流の島の波の音
身に入むや奥の院への苔の道
身に沁むや地図より消えし父母の里
身に入むや音を立てずに吞むスーヴ

石井喜恵
反町修報
曆文
曆文
昇
延昭
マスマ
喜恵
以上特選

第五例会 (浦和)

句碑囲む石に貌あり新松子
朝の陽を受けて本領新松子
新松子旧街道の蔵の町
丘の学校黄傘が走る刈田道
類なづる藁の香りの刈田風
教寄屋門見越しの松の新松子
藁匂ふ瑞穂の国の刈田原
晴れやかに稲掛け並ぶ刈田かな
新松子名残の宿の松並木
聞こゑ来る電車の遅れ刈田道
天守閣無き石垣や新松子

梅澤佐江報
河野はるみ

義子
宣子
千祐
玲子
夏野
佐江
以上特選
知子
宣子
千祐
義子

刈田さらさら野鳥にんまり神の里
濃く淡く縞うつくし刈田原
鱗片のずしりとつまり新松子
まなざしの清しき男の子新松子

はるみ
夏野
玲子
佐江

若松例会 (京橋)

朝まだき肺葉みたす爽気かな
霧の街葉脈さぐるごと往けり
秋蝶の葉風に遊ぶ向島
つきだしは今塩茹での落花生
大釜で湯浴みの風情落花生
葉擦れにも色づきの音秋の山
花言葉添へて文書く十三夜

正木萬蝶
石田慶子報

以上特選
月を
星歩
佐江
マスマ
千春
はるみ
千祐
京子
慶子
稀香
ひろこ
鶴城
萬蝶

関西例会（大阪） 森本早苗報

雁の竿こぼれ落ちそなひと雫
雁渡る赤城の山の名台詞
雁渡る紅き夕日を従へて
あの山を越えれば他郷雁渡る
端正なプリンス号や鰯雲
かりがねや目鼻うすれし磨崖仏
權の音の秋を軋むや淡路島
晴れの日は晴れに疲れる草の花

——以上特選——

フェニックスの地層の岩や雁渡し
天空のコスモス園や声響く
リハーサル無き人生の夜長かな
かりがねや客待ち駱駝立ち上がる
百舌鳥猛る百周年へエールかな
頬朱く染めたる張手相撲の日
雁が音のかすかに流る橋の上
ふちばかま職人技の京人形
をんなでもつい試飲する新酒かな
ママ友のいつか婆友秋高し
閉門の梵鐘が鳴り雁渡る

洋子
満耶子
ノルン
道子
早苗
和子
千津子
人美
千世子
さわゑ
嶋田洋子
和子
早苗
人美
千津子
満耶子
ノルン
洋子
道子

昔話あれこれ 53

兼家の専権

兼家は、師輔の三男であり、長兄伊尹没後に次兄の兼通との間で摂関の地位を激しく争うが、敗れて一時不遇を託った。が、兼通死後右大臣に昇進。（「昔話あれこれ52」に既述）冷泉院・円融院の外叔父、一条院・三条院の外祖父として、公卿として二十年、摂政・太政大臣に昇りつめ、栄華を我物とし、それを息子たちに伝えた。

『大鏡』では、牛車の中でも、相撲の節の場の天皇の前でも、寛ぎ過ぎて不作法であると、人々は密かに批判したとある。

次男道綱の母の事

道綱の母は藤原倫寧の娘で、和歌の

上手な人であった、『蜻蛉日記』の作者である。

ある夜、兼家が訪れるとなかなか門を開けないので催促したところ、

嘆きつつ独り寝る夜のおくるまは

いかに久しきものとかは知る

（大意 貴方は門を開けるのが遅いとおっしゃっていますが、嘆きながら独りで寝る夜明けまでの時間がどんなに長いものかご存知でしょうか）

と歌を詠んだ。兼家の返歌は

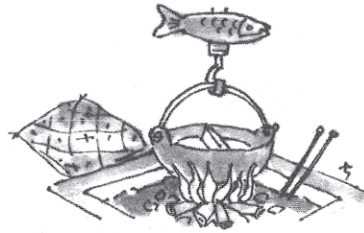
げにやげに冬の夜ならぬ槇の戸も

遅くあくるは苦しかりけり

（大意 なるほど貴女の言う冬の夜長を待ち明かす辛さはもちろんだが、槇の戸が開くのが遅いというのも辛いものだよ）

道綱は大納言になったが、六十六歳で亡くなった。（つづく）

各地句会



雛の会 (浦和)

洞爺湖に色を零して照紅葉
尼寺の水面紅増す照葉かな
太陽と交信するかに照紅葉
ダム影山の影置く照紅葉
電車のベル無人の駅の照葉かな
秋時雨古刹に闇の深まりぬ
大家族遠くなりしや秋刀魚焼く
敗荷の池より暮るる古刹かな

櫻蔭句会 (浦和)

散歩大腹這ふ木蔭残暑かな
残暑とて時はひそかに歩をすすめ
秋散歩名もなき花にはげまされ
星の名のつきせぬ魅力天の川
往年の名曲に酔ふ晩夏かな
残暑永し少年川を泳ぎきり
佃煮の名高き路地に秋茜
残暑の町をつきぬけて行く救急車
名馬の走り輝き増して秋入日
坂登る絡み付くかに残暑光
名子役老いて悪役秋団扇

芽吹句会 (浦和)

公子 白露かな庭の要の石に艶
輝翠 柿たわわ表札つけし空き家かな
桂子 艶艶の柿の初物丸齧り
燈女 秋惜しむ修正液の白さにも
はるみ あなうれし里の甘さの柿屈く
喜恵 修道女の双髻白髪うらら
チアキ 秋風や修繕済みし鐘撞堂
佐江 鈴生りの小柿に群るる雀かな
幫間の居住まひ正す白露かな

りそな俳句会 (浦和)

公子 新蕎麦の幟旗めく街の昼
行雄 杉箸のパリツと割れて走り蕎麦
千恵 空青く海蒼し御崎馬肥ゆ
久美子 喉越しと半可通ぶる走り蕎麦
多美子 秋の駒馬上も高き早池峰山
由紀子 行く雲を追ひつ追はれつ秋の駒
茂子
美智枝
美子
真理
幸代
山 茶 花 (浦和)
もみぢ狩湖水にうつる色景色
色鳥来五百羅漢の膝の辺に

玲子
富子
修

ひろこ
千重子
弘子
チアキ
久美子
道を

道を
マスミ
久美子
勲
建治郎
雅夫

美江子
マスミ

櫻の会 (浦和)

誰も居ぬ家へ「ただいま」虫時雨
半世紀寄贈の卓と生き秋思
書きて消す言葉に愁ひ虫時雨
化野の水子なだめる虫の声
虫しぐれ千の鈴なり四方の風
バスの席譲られ微妙秋思かな

芙蓉句会 (浦和)

野分あとふと高空でありにけり
御唱名となへつ臥しぬ荒れ野分
野分して道路に踊るポリ袋
佇めば身を擦り抜けて秋の風
薄月見ゆ団栗ころりころころ
見得を切る『五人男』や秋の宴

たかなな俳句会 (川口)

寝待月思惟仏のごと佇めり
長月や師に選びをる一筆箋
長月や埠頭に戻る練習船
虫の声踏まずに歩く路地灯り
盆灯籠造花に水は要介護
喪の帯を解かず貪る落花生
長月やよもやま話を繰り返す

さざきサークル (浦和)

あつ子 宵闇や駅に始まる在所の灯
朋子 宵闇ににらみを利かすセコムの眼
裕誌 宵闇に猿の声聞く八瀬の里
富子 濁り酒大漁祝ふ長の家
文子 英字紙でくるみて渡す濁り酒
千重子 どぶろくで赤鬼になる大男
濁り酒無口な男喋りだす

皐月の会 (浦和)

長月や素描の裸婦の黒目がち
晩秋の税の屋根や蔵の街
三味の音にせせらぎ消され風の盆
一合を余す新米共白髪
赤とんぼ素に戻りたる通学路
青虫を素手で掴みて強がりぬ

青葉の会 (浦和)

秋袷帯を締むるに手を借りて
敗荷の池に真鯉の唯一匹
敗荷や生涯閉ぢし沼の面
大の里紺の締込み勝相撲
敗荷や残照のごと沈みゆく

昇

俱子

由美子

啓子

満智子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

和子

咲きはこり敗荷あはれ花の果て
敗荷となりてどうどう風に揺れ
夕暮の雨降る池の破れ蓮
大相撲二人の切符握り締め
締塗の器見事やとろろ汁

新樹の会 (浦和)

茸売訛ゆたかに山自慢
粧ふ山列車の窓を食み出せり
揉め事を丸く納めて茸汁
名画座に「駅馬車」かかり初さんま
車座の宴の賑はひ秋収め

鶴川山百合句会 (鶴川)

一房の葡萄仲良く二人の子
良夜かな網野月をは良きをとこ
予備校の全室灯る良夜かな
そぞろ歩き繋ぐ手探る良夜かな
白き指貪る夜の黒葡萄
葡萄買へば葡萄たまはる日でありぬ
黒葡萄なにか秘密のありさうな
蔓籠五十年貫緑出せし山葡萄
合否待ち良夜外灯父の蔭
盃のお多福ゆるる良夜かな

洋子

公子

美子

真理

輝翠

修雄

修雄

修雄

修雄

修雄

修雄

修雄

修雄

修雄

修雄

修雄

修雄

修雄

修雄

修雄

修雄

修雄

修雄

修雄

修雄

修雄

ミモザの会 (横浜)

割烹着の似合ふ妻ゐて菊膳
日の本の国旗かかげて運動会
引き算の味込みゆきぬ菊膳
秋うらら今日一日は何もせず
ガードレールに青き郁子の実ひとつだけ
祝膳に祖母のつくりし菊膳
さそり座のをんなと酌みし濁り酒
菊膳子は知らぬ間に酒好きに

慶子 史代 玲子 美千子 栄子 亜弥子 萬蝶 千春

和歌山水明句会 (和歌山)

赤とんぼ敵も味方も一つ塚
雁渡る境界線の無き大空
乾杯のグラス高々新ワイン
秋気澄むばつたり出会ふ古き友
ふぢばかま職人技の京人形
コスモスや顔うづめては驚かす
秋茜低空飛行で庭視察
かりがねや侍坂を登りきる
りんどう俳句会 (浦和)
軒の端に増ゆる吊り物暮の秋

和子 道子 千枝子 千世子 満耶子 さわゑ 洋子 廼代 君夫

青空を指で回して林檎もぐ
底紅や今は昔の指腹婚
暮の秋人氣なき道灰明り
檜柱に当つる指矩秋の風
指揮棒のいざなふ空を雁渡る
指切りの約束ほどけ秋の雨
グートルを巻いて秘伝の茸狩
指呼澄むや白む寒露の二番線
俳句の手ほどき (岩槻)

読み止しの本のあれこれ秋惜しむ
張板に母の面影冬日和
穏やかな夕暮つづき秋惜しむ
秋惜しむ鎮守の森の能舞台
うたかたを目で追ふ河畔秋惜しむ
三百年涸れぬ見沼や秋惜しむ
友からの張り子赤べこ夜半の秋
庭下駄の褪せし鼻緒や秋惜しむ
京寺の旅を満喫秋惜しむ
秋惜しむ宿場のはづれ常夜燈
蓑虫が一張羅着て風の中
影法師伸ぶる家路の秋惜しむ
遅咲きの花にエールや秋惜しむ
天守まで急階段や秋惜しむ

順子 翔太 夕峰 徹雄 まりこ 寿夫 風子 卓郎

コクーンシテイカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)
蚯蚓鳴くいづれは捨つる稀観本
無月なり樹上に眠る猿の群れ
無月には無月の風情タワーの灯
児らの絵の魚にまつげ木の実落つ
開け放つ窓に無月の沖つ風
王護る壇輪の武人蚯蚓鳴く
参道に神慮の証木の実降る
あゆみの会 (浦和)
由美子 昇 健司 洋子 俱子 早都子 延昭

延昭 佐江 義子 徹平 翔太 忠男 美子 桂子 久美子 幸代 知子 卓郎 千アキ かつ子
姫と侍女同じ面立ち菊人形
菊人形強弁慶も花柄に
菊人形姫の台詞が聞こえさう
鴉の声朝餉の箸の止まりけり
鴉日和フリー切符で気まま旅
菊人形脚長蜂が偵察に
蛸 蛸 の 会 (浦和)
秋深し・苔むす石の文字読めず
銀漢や星の王子の金の髪
ワイン香の渴き癒すや十三夜
どこからか猫の集ひし十三夜
灯消しドビュッシー弾く後の月
収穫を策いつばいに昼の虫
さち子 礼子 夏野 元美 幸子 しろく 俱子 和子 靖子 重子 啓子 藻好

欠くるとこ無しと思へど十三夜
乾きたる木々の葉音や秋深し
秋深しジャズカフエ灯る港町
角攻むる三と金黄楊実る
シャッターを彩るアートの後の月

円卓の会 (浦和)

アトラスに天体重き秋夜かな
実紫こぼれて水面乱しをり
爽やかやボッチャの描く放物線
自傷せる水の惑星後の月
キャンパスに今年限りの虫残る

子供なき吾へと秋の風船が
早立ちの無人駅舎や露時雨
白熱灯の傘を買ふなり秋深し
キスオブファイヤーをんなひとりの宵月夜
闇の世に何を見紛ふ保己一忌

蘭の会 (浦和)

十六夜や胸のつかへの取れぬまま
十六夜や今宵もひとり縄のれん
秋寒し猿と入りたる露天風呂
十六夜や美酒で飲み込む迷ひごと
赤い羽根笑顔の人に並びたる

ひさの
秀子
風舎
月を
宣子

卓郎
京子
亮一
修

月を
拓真
道を
翔太
輝翠
鶴城

夕峰
寿夫
和子
伸子
小麦

赤十字世界を繋げ愛の羽根
戦争は大なる浪費赤い羽根
見損ひせて既望をさがしたる
二百十日登呂遺跡にもあらむかな
十六夜の草木息を静めけり

若鮎句会 (浦和)

日の匂ひ纏ひて帰る運動会
べらばうな世の片すみに曼珠沙華
ウインナの蛸の逃げきる運動会
段雷のそらははるばると運動会
殿を務め候ふ運動会
運動会の音のみ聴きて過ぎゆけり
青山に誰の優しさ曼珠沙華
運動会のバトンは畳柔道部
曼珠沙華にもお国訛のあるやうで
彼岸花咲きて見送る河原道

めだか句会 (浦和)

豊年の踊りも廃れ峡の村
記念樹の時を繰るかに霧紅葉
朝霧に浮かぶ高架の車列かな
里山に羽衣落つる霧の朝

しょうこう
風子
月を
京子
風舎

秀子
芳春
山菜
ひとみ
貴

拓真
真
稀香
月を
喜夫

章嘉
莊志
和子
恵美子

承認は他を許すことロザリオ祭
霧流れ歩荷現る尾瀬木道
あぜ道の小さきあしあとと霧の朝
山霧や囚はれぬやうバス走る
夕近し霧を背負ひし登山道
認め合ふ互ひの文化秋祭
認証の指の泥染み秋収め
豊年や黄金の里の発車ベル
霧深し富士五合目でもやもやす

若枝句会 (浦和)

無花果の茎より白き甘露かな
馬肥ゆる河原の鍋の具だくさん
一つ星灰と長夜に残りけり
いちじくの尻から割きて君と食む
望月牧すたれども馬肥ゆる

若楠句会 (浦和)

見切り発車の前途多難や秋時雨
揺り椅子の手作りキルト秋時雨
秋時雨階段狭きジャズ喫茶
松茸や七輪の火と母の顔
濡れそぼる愛犬の暮秋時雨

知子
六弦
美津子
眞美子
道代
月を
はるみ
三茅

美佐子
貞代
泰子
みどり
泰生

直子
京子
操
真由美

到来の松茸前にさてさてと
秋風や七つの晴着飛びはねる
吸ひ物に松茸二葉漂ひぬ
七つ星金木犀の花に似て
七色の色鉛筆や秋澄めり
秋しぐれ峠の先は青き空
秋時雨赤ちようちんの人となる

小 梅 の 会 (浦和)

風立ちぬ小江戸に秋の聲を聞く
秋風や横丁多き蔵のまち
秋澄めり午前六時の時の鐘
軒天に明るく映ゆる吊るし柿
秋気澄む一番街に小江戸の香

越 後 の 会 (浦和)

尼寺の垣根新たに秋深し
湿原の木道つつむ草紅葉
背で聞く夫の蘊蓄秋刀魚焼く
猫島の秋刀魚のけむり波静か

弘子
文子
葉子
久美子
慶子
風舎
宏治

恵子
進

隆文
隆然
道を

輝翠
宣子
真理
翔太

― 散歩道 ―

「愛おしいネックレス」を読んで

榎本道代

清山尚己さんの水明創刊95周年記念エッセイ「愛おしいネックレス」を読み、感動しました。

文中には、当時45歳だった作者が通信教育で保育士資格を取得。

紆余曲折を経て保育園に就職を。そこで出会った3歳児「あやのちゃん」とのエピソードが綴られていました。

目には見えないネックレスが、作者の胸の中でキラキラと輝いていることを想像し、涙が溢れました。

新春俳句大会のご案内

[日 時] 令和8年2月1日(日) 12時45分受付
13時15分投句締切

[会 場] さいたま共済会館5階(501、502)

[投 句] 「冬夕焼」(傍題は「冬茜」及び「寒茜」のみ)
「初鏡」(傍題は「初化粧」のみ)
※ 各々1句ずつ、2句の投句となります。

[参加費] 1,000円

[申 込] 1月20日(火曜)までに参加費と申込書を
添えて発行所総務部宛にお願い致します。

※ 年当初の俳句大会です。日時をご確認の上奮ってご参加下さい。

※ 昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参下さい。

事業部

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。 主宰 山本鬼之介

[指導者] 網野月を

[作 品] 5句 [受講料] 1,000円

[方 法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③110円切手を同封 ④返信用封筒は 不要 ⑤締切なしで随時受付

[送付先] 網野月を 電話 080-7580-0208

〒338-0012 さいたま市中央区大戸1-31-2

令和8年度

例会・句会指導者及び幹事の会 開催のお知らせ

今回も新春俳句大会に合わせて、指導者及び幹事の会を開催致します。

各例会および各句会の指導者及び幹事の顔合わせを兼ねて、幹事の役割についての認識を深めて頂くことで、水明俳句会の更なる発展を目指すものです。

万障お繰り合わせの上、是非のご出席をお願い致します。

[日 時] 令和8年2月1日（日） 午前10時～11時半

[会 場] 浦和コミセン第14集会室（浦和パルコ10階）

[議 題] ・令和8年度の年間事業計画について

・令和8年度の新運営組織について

・新編集部の体制について

・例会・句会幹事の役割について

・各例会および各句会の開催時間、会場、幹事等
の変更があった場合について

・各例会および各句会の現状報告及び情報交換

※ 欠席の場合は、代理の出席を立てて下さい。また、その旨を総務部へご連絡下さい。

※ 午後の新春俳句大会は、さいたま共済会館への移動となります。

主 宰 山本鬼之介
幹事長 網野 月を

水明忌のおしらせ

- [日 時] 令和8年2月28日(土) 12時45分受付
13時15分 投句締切
- [会 場] さいたま共済会館5階(501・502)
- [参加費] 1,000 円
- [申 込] 2月号に添付の申込書に参加費を添えて発行
所総務部宛にお申し込み下さい。

「水明忌」は、長谷川秋子（第2代主宰）、星野紗一（第3代主宰）、星野光二（第4代主宰）の忌を修する日です。皆様奮ってご参加下さい。

※当日昼食の用意はありません。飲み物は各自ご持参下さい。

兼題など詳細は2月号に発表いたします。

事業部

令和8年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。新人登龍門の主旨をよく理解されて多数のご応募をお待ちしています。

- 応募資格** 季音同人を除く同人・誌友
- 応募句** 未発表作品：15句（表題を付す）
水明集・句会報等「水明」誌及び外部に発表した作品は不可
- 締 切** 令和8年2月15日（発行所必着）
- 応募方法** 令和8年水明1月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

絶賛発売中

2025年

9月12日全5巻一斉刊行

角川

季語別

俳句集成

角川書店編

各巻定価(税別)冬2,530円／夏2,640円／
秋2,440円／冬2,420円／新年2,090円
四六判／並製204×152.8mm

●季語・表現・流行の変遷が分かる

●一大俳句アーカイブ

●俳人約3400名による

6万6千句超という圧倒的な充実度

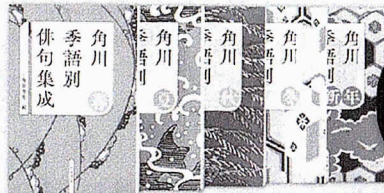
●無季俳句、自由律俳句を「新年」の巻に収載

好評既刊

『新版 角川俳句大歳時記』
圧倒的な規模を誇る
俳句歳時記の最高峰

『新版 角川季寄せ』
「大歳時記」の季語を
手軽な文庫サイズで！

俳人協会
現代俳句協会
日本伝統俳句協会
推薦!



KADOKAWA

KADOKAWA公式サイト <https://www.kadokawa.co.jp/>

発行 株式会社KADOKAWA 〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 [季語別俳句集成]編集室 050-1744-2828

座談会 最近の名句集を探る

吉田 律『一点』

森尾ようこ『惑星』

北大路翼『給食のをばさん』

俳句四季新人賞・

奨励賞受賞者のいま

新作10句競詠

俳句四季大賞受賞記念

作品40句 中村和弘

※巻頭三句

正木ゆう子／高野ムツオ

片山由美子／星野高士

井上泰至／佐藤文香

※今月の華

大塚 凱＋辻美奈子

※俳句と短歌の10作競詠

及川真梨子＋平井 俊

※10000人の源流

山田弘子／藤井啓子

新連載

俳壇ランドスケープ

浅川芳直

司会 筑紫磐井

大西 朋

小川 楓子

坂井諒一

※好評連載

成瀬政博

とりあえずの日々

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西 朋

俳句へのまなざし

井上泰至

俳句の詩語

イメージ辞典

橋本喜夫

俳句のレトリック

藤村公洋

俳句のつまみ

神作研一

てのひらの江戸

古典籍を旅する

堀田季何

諸家書架

石井隆司

たもとほる

俳句もやま話

二ノ宮 雄

俳句四季
Haiku Shiki

2026年1月号

12月20日発売
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

「水明」創刊95周年記念祝賀会

九月二十八日（日）、山本鬼之介主宰「水明」の創刊九五周年記念祝賀会が、さいたま市のロイヤルパインズホテル浦和で開催された。祝賀会は日高道を氏の司会で進行し、挨拶に立った山本主宰は、今回『長谷川かな女の百句』を出版して、かな女の俳句に正面から向き合うことは予想以上に難しかった、「水明」の原点である、かな女に戻る、という目的を達成したいと語った。続いて来賓の高野ムツオ氏は、「水明」という誌名はそのまま



山本鬼之介主宰



山本主宰（前列左から2人目）を囲んで

俳句の豊かさとお行きを示している、と祝福した。

池田澄子氏の発声で乾杯した後、会の後半では、法螺貝の音色と共に山伏の原田自然氏が登場し、法螺貝・宝剣の儀式を行った。「水明」のメンバー五人（青木鶴城・網野月を・小林京子・日高道を・皆川更穂氏）によるバンド演奏では、「コーヒールンバ」上を向いて歩こうなどの演奏で場内を盛り上げた。会の最後は後藤章氏が挨拶し、山本主宰による三本締めで和やかに終了した。

創建の時の麓に冬の月

鬼之介



燕にも五代の家格蔵の町 鬼之介



前列左から池田澄子氏、山本鬼之介主宰、高野ムツオ氏、後藤章氏、杉本青三郎氏。
後列左から、同人の日高道之氏、青木鶴城氏、網野月を副主宰、来賓の稲田眸子氏

「水明」創刊95周年 記念祝賀会

2025年9月28日(日)、ロイヤルパインズホテル浦和



乾杯の発声を行う池田澄子氏(左)と、祝辞を述べる高野ムツオ氏

九月二十八日(日)、埼玉・ロイヤルパインズホテル浦和にて、「水明」創刊九十五周年記念祝賀会が開催された。池田澄子氏、高野ムツオ現代俳句協会会長、後藤章現代俳句協会専務理事、杉本青三郎埼玉県現代俳句協会会長、稲田眸子埼玉県俳句連盟会長が来賓として参列した。

「水明」は一九三〇年、長谷川かな女が創刊。山本鬼之介主宰は、「とにかく「水明」は初代かな女の原点に戻ろうというのが私の目的で、それが達せられてきていると嬉しく思っております」と語った。同人による歌謡メドレーのバンド演奏などが会を盛り上げ、閉会の言葉では網野月を副主宰は、池田澄子氏から「俳人は今まで作ってきた俳句より明日はもっといい俳句が作れるって、信じていなくてはだめよ」という言葉をいただいたと明かし、「ここにいる皆さんに送りたい言葉です」と述べた。

山本鬼之介主宰



水明発展基金御礼（敬称略）

— 令和七年十一月三十日現在 —

山本鬼之介	山下ユリ子	池田珪子	西幅公子	駒谷行雄	松井由紀子	武田重子	石井喜恵	岡田宣子	大塚茂子	飯田忠男	小田三茅	山崎郁子	飯室夏江	原田秀子	森下美智枝	寺町知子	森和子	阿部貞代	匿名
50	5	10	5	2	1	6	20	10	10	10	2	10	5	20	5	2	3	3	3
口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口

曲淵徹雄	田中章嘉	綿引まりこ	川崎道子	綿貫ひさの	穴戸洋子	近藤徹平	熊倉千重子	保坂翔太	小駒さち子	小倉倭子	石田慶子	大場順子	篠原さよ子	菊池ひろこ	田口文子	福田千春	海老名ノルン	神澤晴子
20	5	5	10	5	11	10	5	10	10	30	10	10	5	20	2	10	30	2
口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口

水明塾より	日高道を	小林京子	皆川更穂	秋谷風舎	河野はるみ	青木鶴城	三浦真由美	石井喜恵	丸山マスミ	森和子	石黒由美子	清水桂子	山岸久美子	田中章嘉	糸井しるく	菅原真理	— 合計 —
	2	1	1	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	411
	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口



<p>特集 天翔ける午年の俳人たち</p> <p>新春対談 俳句・ふるさと・日本語</p> <p>片山由美子×長谷川 權</p>	<p>新春巻頭作品7句</p>	<p>加藤耕子・今瀬剛一・宮坂静生</p> <p>加古宗也・能村研三・正木ゆう子</p> <p>恩田侑布子・野中亮介</p>	<p>俳壇</p> <p>1月号</p> <p>12月14日発売 定価1000円(税込)</p> <p>巻頭エッセイ 西村和子</p> <p>八木健選 滑稽俳壇</p>	<p>四季巡詠33句「第Ⅴ期」……岩岡中正・辰巳奈優美</p>	<p>風の旋律……井上弘美</p> <p>セピア写真館……二ノ宮一雄</p> <p>季語を考える……仁平 勝</p> <p>能登からの便り……中川雅雪</p> <p>十二か月添削教室……吉原文音</p> <p>編集室の風景……花冠俳句会</p> <p>今月の句……駒草俳句会</p>	<p>連載</p> <p>俳句と随想12か月</p> <p>波戸岡 旭・吉田千嘉子</p>
--	-----------------	--	---	---------------------------------	---	--

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

毎月**25日**発売
定価**1000円**(税込)

月刊 **俳句界**

2026年 **1** 月号

「俳句界」投稿欄
一流選者10名！
充実の投句欄

★新連載
「季節のいろどり」青木亮人
「俳人の本棚」若林哲哉

「こぼれ抄」石井隆司
「人なつかしさの芭蕉」林 誠司

【注目の句集】 渡井一峰『平明』

セレクション結社「扉」 野地邦雄

シリーズ 推薦！注目・期待する俳人②
手拝裕任 加藤かな文 鈴木午後 荒川英之

投稿欄選者新春競詠

特集 **「既視感」から脱却せよ！**
○既視感の正体 依田善朗
○既視感をまねきやすいものとは？
金子敦 蜂谷一人
○私は「既視感」からこうして脱却した
遠藤由樹子 南うみを 月野ぼぼな 関悦史

タラピン 俳句界NOW 栗林明弘

特集 **一句啓上**〜今年の俳句展望

緒方敬 中村和弘 三村純也
谷口智行 夏石番矢 村上喜代子
木暮陶句郎 吉田千嘉子 高柳克弘
百瀬一兔

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文学の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

後記

あけましておめでとうござい
ます。本年も宜しく願ひ申し上げ
ます。昨年は水明創刊九十五周年
記念として、全国大会、および祝
賀会はもちろんですが、水明誌上
では記念作品募集が企画されて、
数々の優れた作品を読むことが出
来ました。俳句作品は勿論、エッ
セイ部門、評論部門でもレベルの
高い生産的な創作活動が行われた
と理解しております。周年行事に
於いて作品募集がおこなわれるの
が恒例になりましたが、日頃から
の水明の文学活動、つまり文筆活
動においても新企画などを考案し
てエッセイや評論・評伝を掲載す
る頁を企画できるようにしたいと
考えます。

水明集・季音・山紫集は通常通

りですが、鼓笛集はリニューアル
してオープンする予定です。しば
らくお時間を頂きます。

令和八年水明の新編集部メンバ
ーを紹介させて頂きます。前田夏
野さんは、第五例会と蝌蚪の会に
所属しています。同じく香宗我部
真さんは若鮎句会所属です。同じ
く平野楽さんはめだか句会と若楠
句会に所属しています。宜しくお
願い申し上げます。

最後になりましたが、昨年まで
の編集部の皆さん、大村節代前編
集長をはじめ、石山かつ子さん、
丸山マヌミさん、大塚茂子さんに
これまでのお仕事の大変なその業
績とご苦勞を改めて御礼申し上げ
たく存じます。お疲れ様でござい
ました。

(月を)

今月のはてな？

分去（わかさ）れ

律（りち）の風

指矩（さしがね）

帯魚（たちうお）

尉鶴（じようびたき）

指腹婚（しふくこん）

稀觀本（きこうほん）

段雷（だんらい）

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご利用の方は 時間内にお願ひします。)

68 67 67 34 32 19 19 18 頁

水明

令和八年一月号

通巻一四四号

令和八年一月一日発行

発行所

水明俳句会

〒330-0064

さいたま市浦和区摩西一〇二二

電話

048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代

半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費

(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費

(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三九三

発行人

山本鬼之介

印刷所

中央美版

令和8年「新春俳句大会」

参加申込書〈申込締切1月20日(火)〉

新春俳句大会 2月1日(日)	参加費 ￥1,000	出席します
----------------	------------	-------

※「出席します」を○で囲んで下さい。

※受付時間・投句締切時間をご確認下さい。

上記参加費 1,000円 を添えて申し込みます。

2026 年 1 月 日

住 所 〒			
氏 名		電 話	

申込書送付先：〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21
水明俳句会

[緊急連絡先]

電話番号	— —
氏 名	

※緊急時に備えて緊急連絡先をお届け下さい。

緊急時のみに使用し、他の用途には使いません。

季音 雪・月・花

三月号 一月十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏名(俳号)

題

最上部の枠から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名つかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先(電話番号)

氏名(本名)

年齢

歳

水
明
集

四月号 一月十五日締切

都・市・町名

都 市 町

氏 名（排 号）

最上部の枠から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

（注意）

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年 齢

歳

山紫集

四月号 一月十五日締切

氏名(番号)

四月の兼題

「若水」(傍題可)

投句対象者 同人及び季音同人「花欄」「月欄」

※最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先(電話番号)

氏名(本名)

年齢

歳

都市又は府県名	姓並びに俳名
---------	--------

通信欄
(近況・感想などご自由に書き下さい)

[illegible]

送り先 二三〇・〇〇六四 さいたま市浦和区岸町四十一二 水明 発行所

新誌友紹介 下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒 -		
氏名		電話番号	- -

[illegible]

季音抄

山本鬼之介

張衣のあざやかなるや秋天下
飛火野にホルンの響く夕時雨
終焉に向かふ華やぎ山粧ふ
老いてこそ人ではありぬ神還
秋しぐれ古刹に闇の深まりぬ
地芝居や殺され役が幕引きに
秋惜しむ空よ草木よ水音よ
空に木に草に声あり秋澄めり
秋霖の昼を灯して神楽坂
冬の湖深淵に時沈みゆく
佳く生きて今日の夕餉の菊膾
ヴィオロンの音色は秋の野に似合ふ
割烹着の似合ふ妻ゐて菊膾
辻を抜く音なき音や神渡
襟正す釣瓶落としの九段坂
新米を指躍らせて研ぎにけり
観月や般若の面の奥座敷
四十島田の心配りや宿の秋

森川義子
森本早苗
山中みどり
網野月を
石井喜恵
井上燈女
梅澤佐江
丸山マシミ
大場順子
青木鶴城
正木萬蝶
日高道を
石田慶子
渋谷きいち
染谷風子
横山君夫
笹本啓子
保坂翔太

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

▼散歩道へ身辺トピック▼

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆▼

テーマ…自由

枚数…二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

次郎吉を困らすほどの良夜かな
梵鐘や普段始まる朝月夜
法螺の音の祈りに集ふ水明祭
広辞苑より食み出してゐる一葉
薄月や人影招く夜泣石
松虫やスカイツリーの見ゆる川
過疎の村棚田守りて新酒酌む
「陳敏」の調べ揺蕩ふ夜長かな
夕暮の「舍人ライナー」ちちろ鳴く
正露丸ひとつ転がる暮の秋
学舎に続く坂道萩の風
こぼれ萩此処は名うての男坂
赤蜻蛉われも入りたしその中に
犬連れの影ゆつたりと秋の浜
坂登る絡み付くかに残暑光
秋の灯や妻の湯浴みの音のして
いつ迄も開かぬ踏切今日の月
ふるさとを踊の下駄の踏みしむる

反町 修
倉田 星歩
霜多光代
森下山菜
皆川更穂
寺町知子
綿引まりこ
前田夏野
元田亮一
田中弘子
阿部幸代
飯田忠男
丸屋詠子
岡田宣子
菅原真理
小林京子
石関六弦
室井早都子

水明例会案内	句会名	日時	会場	指導者	幹事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	菅原卓郎 小林京子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町恵修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗